## 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第5集

# 原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

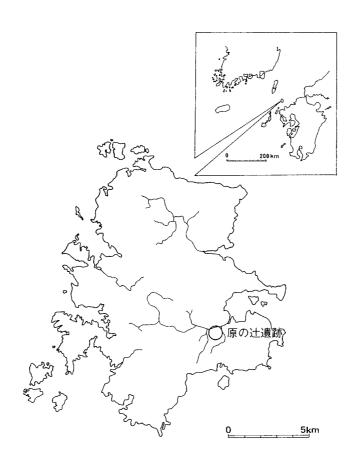
2012

長崎県教育委員会

## 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第5集

# 原の辻遺跡

## 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





カラー写真 1 不條地区遠景 西から内海湾を望む



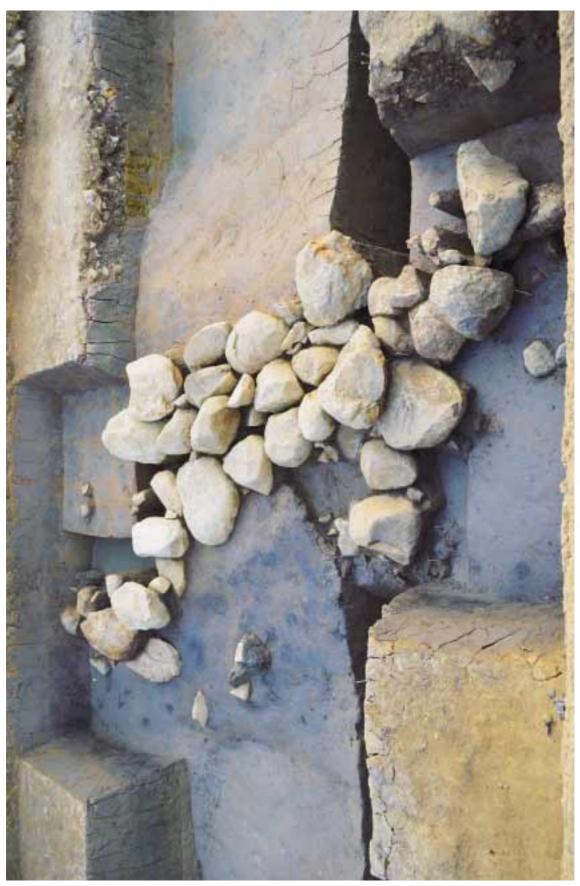
カラー写真 2 不條地区遠景 東から岳の辻を望む



カラー写真3 不條地区遠景 北から印通寺港・唐津方面を望む



カラー写真 4 不條地区2011年度調査区 (上が北)



カラー写真5 不條地区3 b区1号石列(北から)

## 発刊にあたって

本書は,国庫補助を受けて実施した,平成23年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は,これまでの調査で,多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに,中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから,中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが,国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで,当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ,平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の特別史跡の指定を受けました。

平成23年度の範囲確認調査は、壱岐市石田町石田東触字柏田、石田西触字原ノ久保及び芦辺町深江鶴亀触字不條の3箇所で実施しました。その結果、柏田地区では旧石器、近世陶磁器、原ノ久保地区では旧石器、弥生土器、貿易陶磁器が出土しました。また、不條地区では河川跡や弥生時代中期の石列遺構が確認されました。

発掘調査の実施に当たり、ご理解とご協力をいただきました地元関係者の方々に深く 感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、地 域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成24年3月31日

長崎県教育委員会教育長

渡 辺 敏 則

## 例 言

- 1.本書は,原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した,平成23年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
- 2. 本事業は,遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として,平成14年度から実施している。
- 3. 本書に収録した調査区の所在地は,長崎県壱岐市石田町石田東触柏田,石田西触原ノ久保,芦辺町深江鶴亀触字不條である。
- 4. 平成23年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり,長崎県埋蔵文化財センターが担当した。 調査組織

調査指導委員会 委員長 西 谷 正 (九州大学名誉教授・九州歴史資料館長)

委員工楽善通(大阪府立狭山池博物館館長)

委員 佐古和枝(関西外国語大学教授)

委員 髙 倉 洋 彰(西南学院大学教授)

委員 武末純一(福岡大学教授)

委員 本田光子(九州国立博物館博物館科学課長)

委員 松井 章(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究

所埋蔵文化財センター長)

委員 宮本 長二郎 (元・東北芸術工科大学教授)

[委員記載は50音順]

## 長崎県埋蔵文化財センター

所 長 金子真二 東アジア考古学研究室長 安楽 勉 総務課長 北川和広 調査課長 川道 寛 調査課 係 長 町田利幸 調査課 文化財保護主事(研修員) 林 隆 広(調査担当) 調査課 文化財保護主事 片 多 雅 樹(保存処理担当) 東アジア考古学研究室 文化財保護主事(研修員) 田 口 貴 久(調査担当) 東アジア考古学研究室 文化財保護主事 古澤義久(調査担当) 調査課 文化財調査員 宮 武 直 人(調査担当) 調査課 文化財調査員 今 西 亮 太(調査担当) 東アジア考古学研究室 文化財調査員 欣(翻訳担当) 陳

- 5. 本書で使用した遺構・遺物の実測,製図,写真撮影は,長崎県埋蔵文化財センターが行った。
- 6.本書に収録した遺物・図面・写真類は,長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 7. 本書で用いた座標は旧日本測地系である。
- 8. 本書の執筆担当者は,本文目次に()で示している。
- 9. 本書の編集は各担当の協力を得て古澤が行った。

# 本文目次

Ι	遺跡の立地する環境
	1 . 地理的環境1 (田口)
:	2 . 歴史的環境2 (田口)
3	3 . 民俗的環境5 (古澤)
Π	調査に至る経緯7(田口)
$\Pi$	調査
	1.柏田地区9(林・宮武)
	(1) 調査概要
	(2) 土層
	(3) <b>遺物</b>
:	2.原ノ久保地区10(林・宮武)
	(1) 調査概要
	(2) 土層
	(3) 遺構
	(4) <b>遺物</b>
	3 .不條地区21(古澤)
	(1) 調査概要
	(2) 土層
	(3) 遺構
	(4) <b>遺物</b>
	(5) 1号石列について
	(6) 総括
	中国語・韓国語要旨46 (陳・古澤)
付	
	京の辻遺跡における放射性炭素年代
J	<b>示の辻遺跡の花粉分析52 (㈱加速器分析研究所)</b>

# 挿 図 目 次

図 1	壱岐島位置図	1
図 2	2011年度調査研究事業調査区位置図(1/8,000)	8
図 3	柏田地区 平面図(1/200)土層断面図(1/80)周辺地形図(1/2,500)	12
図 4	原ノ久保地区 平面図(1/200)土層断面図(1/80)周辺地形図(1/2,500)	13
図 5	原ノ久保地区 出土土器 (1/4)	14
図 6	柏田地区 出土石器(2/3)	15
図 7	原ノ久保地区 出土石器(2/3)	16
図 8	不條地区調査区位置図(1/1000)	22
図 9	不條地区1区平面図・土層断面図(1/60)	24 • 25
図10	不條地区2区平面図・土層断面図(1/60)	24 • 25
図11	不條地区3区平面図・土層断面図(1/60)	26 • 27
図12	不條地区4区平面図・土層断面図(1/60)	26 • 27
図13	不條地区 3 b 区 1 号石列 ( 1 /20 )	30 • 31
図14	不條地区 4 a 区 1 号礫群 ( 1 /20 )	32 • 33
図15	不條地区1区・3区出土土器(1/3)	36
図16	不條地区3 b 区出土土器(1/3)	37
図17	不條地区4区出土土器(1/3)	38
図18	不條地区出土木器①(1/4)	41
図19	不條地区出土木器②(1/4)	42
図20	船着き場周辺復元想定図(1/1000)	43
図21	ため池東岸土層図(1/10)	44

# 表 目 次

表 1	土器観察表	14							
表 2	石器観察表	15							
表3	既往の船着き場周辺調査による層位との対応表29								
表4	遺物観察表(土器・陶磁器)	39							
表 5	遺物観察表(木器)	40							
表6	不條地区調査区地点一覧	45							
	写真目次								
カラー	-写真1 不條地区遠景 西から内海湾を望む								
カラー	-写真2 不條地区遠景 東から岳の辻を望む								
カラー	-写真3 不條地区遠景 北から印通寺港・唐津方面を望む								
カラー	-写真4 不條地区2011年度調査区(上が北)								
カラー	-写真 5 不條地区 3 b区 1 号石列(北から)								
写真 1	田川渡橋の川祀り(2009年6月18日撮影)	6							
写真 2	2 津合橋の川祀り(2011年12月27日撮影)	6							
写真 3	3 出土遺物①	17							
写真 4	1 出土遺物②	18							
写真 5	5 出土遺物③	19							
写真6	5 柏田地区 地山検出状況	20							
写真 7	7 原ノ久保地区 遺構および地山検出状況	20							
写真 8	3 1号攪乱出土清涼飲料水金属缶	35							
写真 9	) 1a区落ち込み2(北から)	47							
写真10	0 2 b 区 1 号溝・4 号ピット(北から)	47							
写真11	1 3 a 区古代土師器(29)出土状況(南から)	47							
写真12	2 3 a 区弥生後期土器(34)出土状況(北から)	47							
写真13	3 3a区弥生中期土器(35)出土状況(南から)	48							
写真14	4 3 b 区 1 号石列(東から)	48							
写真15	5 3 b 区 1 号石列土器(46)出土状況(東から)	48							
写真16	6 4a区1号礫群シカ下顎骨出土状況(東から)	48							

## Ⅱ 遺跡の立地する環境

## 1. 地理的環境

九州北西海上の玄界灘に浮かぶ壱岐島は、福岡県・佐賀県と対馬市の間に位置し、東西約15km,南北約17km,総面積約138 8kmの亀形をした島である。これは、離島を多く抱える長崎県の中では5番目の広さの島となる。平成16年(2004)に4町が合併して壱岐市となり、現在人口は約3万人である。本土との交通手段としては海上交通が主であり、福岡市博多とフェリーで約2時間半、高速艇で約1時間、佐賀県唐津市まで約1時間半で結ばれている。一方、長崎県との交通手段は1日2往復する空路のみである。このため、行政区分上は長崎県に属するものの、経済的・文化的な繋がりは福岡県との結びつきが強い。

3世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝の中で「…居る所絶島…土地は山険しく,森林多く,道路は禽鹿の如し…」と記され険しい山々からなる対馬とは対照的に,壱岐島は平坦な地形であり,高度100mを越す山地が占める面積は極めて小さく,島内最高峰の岳の辻でも標高213mに過ぎない。島の西から東にかけて島内最大の河川である幡鉾川が流れ,内海湾に注ぐ。この川の下流には,沖積平野としては県内最大の平野である深江田原が広がり,米・麦・たばこ・大豆などの栽培が年間を通じて行われており,県内有数の穀倉地帯となっている。そのため,壱岐島では県内で耕地率が最も高く,水産業はもとより農業も基幹産業となっている。これは,平地が少ない長崎県内の離島では見られない壱岐島ならではの特色といえよう。この深江田原の中に原の辻遺跡は位置しており,舌状に張り出した標高6~18mの台地を中心に約100haの規模を誇る。

島の基盤岩は,第三紀に形成された砂岩・頁岩・凝灰岩からなる勝本層群である。その上に壱岐層群が形成されており,これらの上に主として第四紀に形成された玄武岩が広く覆っている。この玄武岩層の割れ目には豊富な地下水が湧いており,現在でも壱岐の人々の生活を潤している。



第1図 壱岐島位置図

## 2. 歴史的環境

壱岐島における旧石器時代の遺跡は,原の辻遺跡をはじめ,カラカミ遺跡,興触遺跡などの数ヶ所で確認されている。ナイフ形石器,台形石器,細石器等が出土しているほか,原の辻遺跡ではナウマン象の臼歯も出土している。

縄文時代の遺跡は壱岐島西側沿岸に点在しており、鎌崎遺跡、名切遺跡、松崎遺跡などをあげることができる。壱岐における初めての縄文時代の遺跡の発掘事例となった名切遺跡では、直径・深さ1m程の貯蔵穴30基が確認され、底面からドングリなどの堅果類が出土した。また、多様な石器も出土している。

弥生時代の遺跡は壱岐島内で約60箇所が確認されているが,代表的な遺跡は原の辻遺跡である。この遺跡は明治時代に発見されており,戦後になって東亜考古学会,九学会,長崎県教育委員会等によって発掘調査がなされてきた。平成5年(1993)以降本格的な調査が始まり,三重の大規模な環濠集落跡であることや,石積みの船着き場を有する大規模な集落であることが確認された。さらに,それまでの調査結果から「一支国」の拠点集落であるとされ,『魏志』倭人伝に登場するクニの中心地が特定された唯一の遺跡と評価された。そして,平成12年(2000)には国の特別史跡に指定された。原の辻遺跡の最大の特徴は,東アジアとの交流を物語る遺物が多量に出土している点であり,三韓系瓦質土器や楽浪系土器などの韓半島系土器,五銖銭・大泉五十・貨泉などの中国貨幣,中国製鏡などが含まれる。『魏志』倭人伝には,一支国について「南北市糴す」と記されている。これらの遺物は,まさにそれを裏付けるように,海を越えての活発な交流が行われていたことを証明するものといえよう(宮崎2008)。

原の辻遺跡の周辺集落として,車出遺跡やカラカミ遺跡をあげることができる。車出遺跡は幡鉾川河口から約5km遡上した山間部の狭い平野に位置し,方格規矩鏡や貨泉,ト骨などが出土している。カラカミ遺跡は壱岐島内中央部やや西側,標高80m程の丘陵部に位置する。ここからは,鯨の骨で作ったアワビオコシや釣針,銛といった漁労具,韓半島系土器,ト骨などが出土している。以上の点から,カラカミ遺跡は原の辻遺跡ほどには及ばなかったものの,漁労を中心とした生活を行い,東アジアとの交流も活発に行っていた集落であったと推測される。今後,この両遺跡と原の辻遺跡との関係の究明が待たれるところである。

上述の3つの遺跡は壱岐島内陸部に位置するが,海岸部にも弥生時代の遺跡がみられる。その中で特筆すべきは,壱岐島の北部勝本町に位置する天ヶ原セジョウ神遺跡である。昭和36年(1961),海岸線の護岸工事の際に中広銅矛3本が出土した。勝本町は壱岐島の最北端で古代より海外交流に際しての重要寄港地として位置づけられていたことから,大陸に向かって出立する船の安全航行を祈願するために埋納されたのではないかと考えられている(須藤1985)。

原の辻遺跡を中心に繁栄をみてきた一支国であったが,2世紀の後半から土器などの遺物が一括遺棄され,弥生終末から古墳初頭期には濠が埋没された状況がみられる。4世紀中頃に入ると原の辻大集落は解体されていく。その要因としては,国内や当時の東アジア情勢の変化が指摘されている。韓半島においては,楽浪郡が313年,帯方郡が314年に,それぞれ高句麗によって滅ぼされた。中国との対外交渉の窓口であった楽浪郡と帯方郡を失ったことは衰退の決定的な打撃となった。また,国内では「邪馬台国連合政権」から「ヤマト政権」へと権力が移行する期間であり,その移行過程の中で存立基盤を失っていったものと考えられる(宮崎2008)。このように,壱岐では5世紀後半に大塚山古

墳が出現するまでいわゆる「空白の1世紀」を迎えることになる。

壱岐では現在約280基の古墳が確認されているが,その大部分が6世紀から7世紀に築造されたものである。形状は円墳が主であり,これらの古墳のうち90余基が壱岐の中央部に集中している。県内最大の前方後円墳である双六古墳,玄室に地元の凝灰岩を利用したくりぬき式の家形石棺をもつ掛木古墳,捕鯨の線刻画が側壁に描かれた鬼屋窪古墳などがその代表例である。また,県内最大級の円墳である笹塚古墳からは,亀形飾金具に代表されるような金銅製の馬具が多数出土しており,国の重要文化財に指定されている。このように,壱岐には特色のある古墳が多数存在し,しかも県内にある古墳のうち約6割が壱岐に集中している。これは,壱岐の首長が,弥生時代より壱岐に伝わるト占の特殊技能を重宝した「ヤマト政権」内部において卜部として重要な役割を担っていたことの証左であるといえよう(中上1995)。古墳の築造時期に注目してみるならば,527年の筑紫国造磐井の乱の際,「伊吉島造,磐余玉穂の朝,石井に従える者,新羅の海辺の人を伐つ。天津水凝の後の上毛布直の造なり」という記事が『舊事紀』の中にみえる。壱岐の豪族たちは,この功績を「ヤマト政権」によって称えられ,その恩賞として経済的な援助をうけ,巨大な古墳を築造することが可能になったのではないかと考えられる(中上1995)。

律令体制下においては、壱岐は対馬同様下国とされ、壱岐郡と石田郡が設置された。島内には国府と郡家が設置され、壱岐直氏の系列が郡司職を世襲した。原の辻遺跡からも貢物や古代の食糧支給に関する内容を記した木簡が5点出土している(平川1995)。天平13年(741)に国分寺建立の詔が発せられると、壱岐国にも国分寺建立計画が立てられたが、当時の壱岐国では度重なる自然災害、疫病や飢饉が蔓延しており、財政面からも新たに国分寺を建立することは不可能であったと考えられる。そのため、壱岐直氏の氏寺を嶋分寺としたことが『延喜式』の中に記されている。この壱岐嶋分寺に関しては、当時の芦辺町教育委員会と長崎県教育委員会が発掘調査を行っている。特筆すべきは、平城京第一造営期(和同元年~養老5年)に使用されたものと同形式の複弁八弁蓮華文の軒丸瓦や均正唐草文の軒平瓦が出土したことである。当時の九州各地の寺院では大宰府様式の瓦が多く使用されているなかで、壱岐だけが平城京の瓦を使用しているということは、当時の朝廷が、下国とはいえども壱岐を政治上・外交上重要視していたこと、さらに、壱岐氏が朝廷内で依然一定の勢力を保持していたことを物語っているといえよう(高野1991)。

古代においても、壱岐は東アジア諸国との交流の要衝であった。その一方で国防の島でもあった。 白村江の戦いの敗戦後、664年に壱岐には烽が設置され、東国地方から集められた防人たちが壱岐に も配属された。しかし、律令体制が崩壊するにつれ防備体制も弛緩するようになり、度々新羅や正体 不明の海賊によって襲撃をうけている。特に寛仁3年(1019)の女真族による刀伊の入寇では大打撃 を受け、壱岐守藤原理忠も戦死している。このとき大宰権帥藤原隆家の指揮のもと、九州武士団が最 終的にこれを撃退したが、以後も海峡を隔てて外敵の侵入は繰り返された。

壱岐島における最大の外敵の侵入は,中世鎌倉時代の蒙古襲来であろう。文永11年(1274)10月,朝鮮の合浦を出発した元の大軍は,まず対馬島内を殲滅した後,壱岐の北西海岸に姿を現した。この時,壱岐の守護代平景隆は,家来百余騎を引き連れ勇猛に戦ったものの最後は力尽き,樋詰城で自刃した。2度目の襲来である弘安の役(1281年)でも壱岐は大きな被害を被った。この時,指揮をとったのが守護代少弐資時である。資時は弱冠19歳にして居城船匿城から兵を率いて蒙古軍と激戦を繰り広げたが,最後は戦死した。この2度にわたる蒙古襲来における壱岐の凄惨な様子は,鎌倉中後期に

成立したと考えられる『八幡愚童訓』の中にも記されている。現在,船匿城のあった芦辺町瀬戸浦一帯は「瀬戸浦古戦場」として県史跡に指定されており,この付近には,資時軍・蒙古軍を問わず犠牲となった人々を弔っている「千人供養塚」,蒙古軍から逃れるために設けられた「中山の隠れ穴」,少 弐資時の墓がある少弐公園があり,壱岐の観光名所の1つとなっている。

室町期に入ると、壱岐は、志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留の松浦五党による分割統治が行われた。志佐氏の代官真弓氏の居城であった観城跡は原の辻遺跡の西約1㎞に位置し、平成8年(1996)と平成17年(2005)に発掘調査が行われた。その結果、14世紀頃の高麗青磁や粉青沙器、ベトナムやタイ産の陶磁器が出土した(河井・田中2006、川口1997)。この時期は倭寇が活発化していた時期であり、志佐氏もそれに名を連ねて東アジアと積極的に交易を行っていたことが裏付けられた。このように、東アジアとの対外貿易を経済的基盤として壱岐を支配していた松浦五党であったが、文明4年(1472)に肥前上松浦岸岳城主波多氏によって侵攻を受ける。この時、松浦五党の代官は覩城で防戦したが敗北を喫した。以後、壱岐は波多氏が支配することになるが波多氏内部で騒擾が起こり、波多氏とその家老日高氏が争うようになった。波多氏は対馬の宗氏を頼り、一方の日高氏は平戸の松浦鎮信と姻戚関係を結び、両者は元亀2年(1571)に一戦を交えることになる。これは「浦海の合戦」と呼ばれている。この合戦によって日高氏が勝利を収めることになるが、結果的に壱岐は平戸の松浦氏の領地となった。以後、松浦氏は明治維新まで壱岐を領有することになる。その後、明治政府は平戸藩統治領を長崎県に編入した。壱岐が長崎県に属している遠因は、この「浦海の合戦」に求めることができる(中上1995)。

松浦鎮信は,九州を平定した豊臣秀吉によって平戸・壱岐の所領を安堵された。その後,秀吉は朝鮮出兵を企図するが,この時,松浦鎮信は秀吉によって壱岐島北部の風本(勝本)の地に築城を命じられる。『壹岐名勝圖誌』には「夜の中に手々に石を持上げ築けり」とあり,勝本城はおよそ4ヶ月の突貫工事で築城され,食糧・武器・軍馬などの兵站基地としての役割を担ったが,慶長の役後に取り壊された。現在は城山公園として整備され,国指定史跡となっている。

関ヶ原の戦いで東軍についた松浦鎮信は、徳川家康により6万3千石の所領を安堵され、ここに平 戸藩が成立する。壱岐は平戸藩領として引き続き松浦氏によって統治された。平戸藩は行政区画とし て壱岐郡と石田郡の2郡を設置し、在方では24の村を置き、その下に「触」とよばれる小地域を設け た。漁村では「浦」と呼ばれる行政区画を用い、8つの浦を設定した。現在でも、壱岐市では各地名 に「触」・「浦」という呼称が用いられている。

#### 【参考文献】

河合雄吉・田中聡一 2006『覩城跡・車出遺跡』壱岐市文化財調査報告書 第8集

川口洋平 1997『覩城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第3集

正林護・宮﨑貴夫 1985『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書 第3集

須藤資隆 1985「第三節 弥生時代の勝本」『勝本町史』

高野晋司 1991 『壱岐嶋分寺 』 芦辺町文化財調査報告書 第5集

中上史行 1995『壱岐の風土と歴史』

平川南 1995「長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書 第124集 宮﨑貴夫 2008『原の辻遺跡 壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社

## 3 . 民俗的環境

ここでは,原の辻遺跡が所在する芦辺町深江鶴亀触一帯の民俗的環境について述べる。深江鶴亀触 一帯の民俗として特筆すべきものは幡鉾川における「川祀り」である。

## (1) 深江鶴亀触の川祀り

深江鶴亀触では田川渡橋と津合橋の2箇所で川祀りが行われている。このうち田川渡橋の川祀りについては喜多正によって詳細な記録が作成されている(喜多2011)。喜多の記録を基に川祀りの概要について整理すると次のとおりである。

#### ( i ) 田川渡橋の川祀り

田川渡橋の西側,幡鉾川北岸に2基の石製小祠と2体の自然石が祀られている(写真1)。ここでは小坂谷,宇竜谷,西谷の3つの講中が川祀りを行っており,小坂谷と宇竜谷は春の施穣祭の日に講員全員で,西谷は年4回旧暦29日(正月川,3月川,6月川,11月川)に各戸輪番で行っている。川祀りでは川の神が好む甘酒等を供える。供えるものは次のとおりである。

- ①シロ酒(甘酒)または清酒を供える。
- ② 深12個 (閏年は13個)を供える。
- ③女竹で作った酒樽12本(閏年は13本)を長さ25cm程度の竹で筒に紐をつけてまとめて吊るし,中に粢のとぎ汁を注いでシロ酒の代用とする場合もある。その場合清酒を別に供える。
- ④女竹を割って作った棚(30㎝四方程度)を吊るし,棚の上に粢を並べて供える。
- ⑤寺から川祀り幡1流れを受けてきて川の神のまわりに吊るす。

川祀り幡には「奉請念中央吉祥天王 奉請念東方持国天王 奉請念南方増長天王 奉請念西方広 目天王 奉請念北方多聞天王」と吉祥天及び四天王が書かれている。

川祀りの目的は川の神に許しを請うことで,各家庭から流れ出る不浄(汚水・屎尿)が川に流れ込むことによって起こる災い(疫病,洪水,水難事故)を避けると同時に講中の安穏と五穀豊穣を願うものである。

## (ii)津合橋の川祀り

津合橋の西側,幡鉾川北岸に3基の石製小祠が祀られている(写真2)。ここでは前目講中が田川渡橋の西谷講中と同様に年4回旧暦29日(正月川,3月川,6月川,11月川)に各戸輪番で川祀りを行っている。

#### (2) 川祀りの特質

川祀りは深江鶴亀触に限らず広く壱岐島内で行われている。山口麻太郎によると壱岐では川の神には2種類あり、それぞれ「川の神」と「カワの神」と区別して考えられている。「川の神」は川の側やため池に座す神で河童はその使いであるとか、川の神そのものであると考えられている。広く水を司る神とされている(註1)。一方「カワの神」は井戸に座す神で、飲料水を司る神であるとされている(山口1934)。この両者の川祀りについて喜多はさらに詳細な説明を加えているが(喜多2011)、田川渡橋と津合橋の川祀りはいずれも「川の神」(喜多分類のB型)を祀る型式である。深江鶴亀触では橋ごとに川祀りが行われ、生活排水に起因する災いを避けるという目的意識を持っていることが注目される。深江鶴亀触の川祀りが歴史的にいつまで遡るものかは詳細に知りえないが、壱岐で最も広い平野である深江田原では水田農耕や畑農耕が古くから行われていたという歴史的環境が、水、特

に排水に関して特別な意識を持つという民俗的心性の形成に大きな影響を及ぼしている可能性が高い。 このようにこの地域における歴史的環境を評価する上で民俗が果たす役割も小さくないといえるであ るう。

註1 川の神は山口によると春雨の夜などに「ヒョー,ヒョー」と鳴きながら一定の道筋に沿って移動するといい,着物の袖をかぶってみると川の神の正体が見えるという(山口1934)。喜多正氏からの聞き取りによれば,川の神の正体をみた者は病気になったり,死ぬといわれているという。川の神が禁忌(タブー)視されている点も興味深い。なお,喜多氏によれば「ピーポ」と鳴くともいわれ,正体はトラツグミではないかとみる考えもあるという。

## 【引用文献】

喜多正 2011「壱岐島の民俗あれこれ」『島の科学』48 山口麻太郎 1934『壱岐島民俗誌』一誠社



写真1 田川渡橋の川祀り(2009年6月18日撮影)



**写真2 津合橋の川祀り**(2011年12月27日撮影)

## Ⅱ 調査に至る経緯

原の辻遺跡は,壱岐在住の小学校教員松本友雄によって明治37年(1904)から明治38年(1905)頃に発見された。その後,昭和2年(1927),松本はこれまでの調査結果をまとめるかたちで原の辻遺跡を中央の学会誌に紹介し,その存在が認知されるようになった。

昭和14年(1939),旧制中学校教員であった鴇田忠正は,耕地整理によって削られた原の辻台地北端の崖面から3層の遺物包含層を確認し,各層の土器を北部九州の弥生式土器編年と比較することで検討を行い,中期から後期へ移行する過程の土器と位置づけ,昭和19年(1944)に「長崎県壹岐郡田河村原の辻遺蹟の研究」としてまとめた。

戦後の昭和26年(1951)から昭和36年(1961)には,京都大学や九州大学を中心に組織された東亜 考古学会によってはじめて本格的な発掘調査が行われ,この時の発掘調査では,大量の弥生土器の他, 各種鉄製品,青銅器,韓半島系土器,楽浪系土器が出土したことから,韓半島や大陸との関連性が指 摘され,中央学界でも注目を集めた。しかし,この頃から始まる高度経済成長期の世相を反映してか 地元の遺跡保存に対する認識は薄く,遺跡の位置する丘陵周辺は畑地から水田への転換が図られた。 このため,遺跡の破壊が進行することになる。

昭和49年(1974),現在の石田高原地区における水田改良工事の際,甕棺墓や箱式石棺墓からなる墓域が検出された。そのため,長崎県教育委員会は緊急発掘調査を行い,1,000㎡の範囲に甕棺51基,石棺19基以上,溝4条を確認し,副葬品として戦国式銅剣,鉄製品,トンボ玉,ガラス玉,勾玉,管玉などが出土した。これを契機に,昭和50年(1975)から昭和52年(1977)にかけて長崎県教育委員会が範囲確認調査を実施した結果,大川地区,原ノ久保A・B地区において新たな墓域やV字状の溝が確認され,陶質土器や中国鏡,有鉤銅釧などが出土した。これにより,遺跡の範囲が台地の南側まで広がることが確認された。

平成に入ると,幡鉾川流域総合整備事業が計画され,それに伴う発掘調査が台地周辺の低地部を中心に行われた。平成3年(1991)から平成4年(1992)の範囲確認調査を経て,平成5年(1993)以降,広大な面積の発掘調査が実施された。その結果,遺跡は100haの範囲にも及び,台地を多重環濠で囲む大規模環濠集落であることが判明した。平成7年(1995)には,原の辻遺跡が『魏志』倭人伝に記された「一支国」の王都であることが確定し,翌年の平成8年(1996)には,弥生時代中期前半に築かれた日本最古の船着き場遺構が発見された。この一連の発掘調査の成果により,平成9年(1997)に原の辻遺跡は国史跡に指定され,平成12年(2000)には特別史跡に指定された。

平成14年(2002)以降は,原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業が進められている。丘陵北東部の発掘調査においては,土坑群や竪穴住居群などの遺構の実態が明らかにされ,その資料が蓄積されるとともに,時期別の変遷についても明らかになりつつある。また,環濠についても過去7度にわたる調査結果から複数の環濠があったことが確認され,その資料の集積に基づいて平成22年度に復元整備が行われた。丘陵西側低地部にあたる不條・八反・鐙ノ池地区では,船着き場跡,水田畦畔跡,多重環濠,弥生時代から古墳時代にかけての水田遺構やそれに関わると考えられる多数の溝など,丘陵部とは異なる様相を呈している。

平成23年度は夏と秋に2回調査を行い,夏の調査では,5月26日から7月29日にかけて墓域の広が

りの解明と環濠などの重要遺構の確認を目的として柏田・原ノ久保地区を調査した。柏田地区は丘陵 部南東に位置し,原ノ久保地区は遺跡範囲の南端に位置する。秋の調査では,10月7日から12月26日 にかけて船着き場遺構周辺の重要遺構の確認を目的として不條地区を調査した。

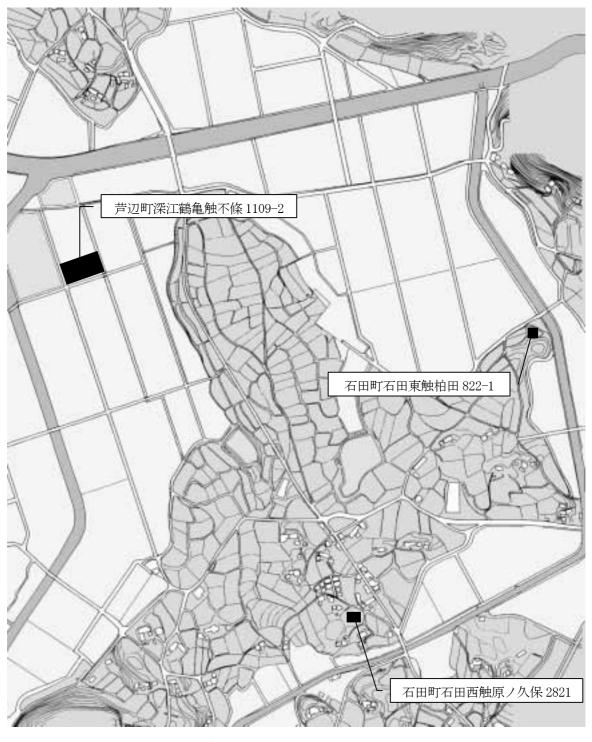


図 2 2011年度調査研究事業調査区位置図 (1/8 ,000)

## Ⅲ 調 査

## 1.柏田地区

## (1) 調査概要

調査対象地はかつて水田だったところで、現在は農業放棄地となっている。南西から北東にのびる低丘陵の先端部に位置し、調査歴はない。調査対象地の南西に位置する大川地区では、長崎県および 壱岐市(旧石田町を含む)による発掘調査で多くの墳墓遺構が確認されている。

調査区は南北20m、東西 5 mの100mを設定し、発掘調査は平成22年 5 月26日から開始し、7 月29日に終了した。

自然地形は南側の低丘陵部から北へ傾斜する。調査区南側で地表面(約8 2m)から約0 3m、北側で約1 3mの深さで地山(自然堆積無遺物層)を検出した。所々で不定形のプランが検出されたが、明確な掘り込みではなく、何らかの植物根の跡であろうと推測されたので遺構と判断しなかった。

## (2) 土層

I~V層に分割した。 I 層は耕作土および造成土(水田造成時か?)で旧石器が混じる。部分的に V層(地山)の土粒が混じるが、これは南側の低丘陵部側を切り土し、南側へ盛り土したものと思われる。 II 層は水田以前の耕作土で粘り気のないパサパサした土質から畑作土と思われる。旧石器および近世磁器が混入する。 II 層も II 層同様に土質から畑作土と思われる。 遺物は含まれていなかった。 IV層も土質は II~ III 層に似ており、かつての畑作土と判断した。旧石器が含まれるが、出土状況などから客土とともに移動してきたものと思われる。 V 層は自然堆積の無遺物層である。

### (3) 遺物

## ①石器

柏田地区においては21点の石器が出土した。その技術的特徴から旧石器時代の所産と考えられる。 多くは水田造成のための客土(I層)中から出土し、それより下位の包含層(II層およびIV層)から 出土した石器についても出土状況から客土とともに移動したもので、原位置は保持していないと思わ れる。製品は7の台形石器のみで、その他石核・剥片・チップが見られる。

7は台形石器である。器軸に直交するように剥片の刃縁を横位に用いる。両側縁は折り取った後に腹面側からやや内湾気味に整形剥離が施される。石材は腰岳・牟田系の黒曜石。8~9は剥片。打面を有し、先行剥離はいずれも同一方向からおこなわれており、不定形ながらも石刃技法の特徴を持つ。11は自然面打面の石核で半割した石の分割面を作業面に設定して剥離作業を行っている。石材は青灰色を帯びた黒曜石で針尾島産。12は磯道技法による石核。打面は単設で円礫の上端部に作業面側から打面を作り出す。作業面は正面のみで、石核調整は行われていない。剥離作業が進行した個体であり、末端部は作業面の内に深く入り込む。

## 2.原ノ久保地区

## (1) 調査概要

調査対象地はかつて果樹園だったところで、現在は農業放棄地となっている。原の辻遺跡の南側に位置し、調査歴はない。調査対象地の北側に位置する原ノ久保A地区と呼ばれる区域では、平成8年および平成12年の発掘調査で墳墓遺構が多数確認されている。

調査区は南北15m、東西20mの300mを設定し、発掘調査は平成22年5月26日から開始し、7月29日に終了した。

自然地形は西から東へ傾斜する。調査対象地の東側に隣接する水田面とは約1 mの標高差がある。 地表面(13 3m~13 9m)から約0 5mの深さで地山(自然堆積無遺物層)を検出した。

## (2) 土層

I層は果樹園の耕作土(表土)で、多くの旧石器が混じる。Ⅱ層は造成土で、検出した溝の堆積(充填)土となる。Ⅲ層は畑作土と思われる。Ⅳ層は地山(自然堆積無遺物層)である。

### (3) 遺構

近現代のものと思われる溝を 7条 (SD01~SD07) 性格不明の落ち込みを 1基 (SX01) 弥生土器 (壺)を廃棄したような穴を I 基 (SX02)検出した。

## (4) 遺物

## ①土器

1~4は表採資料、5はSX02、6はI層の出土である。1~3は弥生土器の甕(口縁部)である。 弥生時代中期後半の資料である。4、6は同じく弥生土器の壺で、3は口縁部で中期後半から後期初 頭、6は後期前半の特徴をもつ。6は土製の漁錘で、欠損している。

#### ②石器

原ノ久保地区からは58点の石器が出土した。全てが果樹園造成の際の客土(I層)中から出土している。製品にはナイフ形石器、台形石器、角錐状石器等がある。その他には剥片、チップが出土しており、それらの技術的特徴から旧石器時代に属すると考えられる。石材は全て腰岳・牟田系の黒曜石である。

13はナイフ形石器。幅広の剥片を素材とする。背面側には同一方向から剥離された先行剥離が残されており、連続的な剥離工程のなかで獲得された剥片である。打点側の1側縁を加工して柳葉形状に仕上げる。石材は黒曜石であるものの、素材やその剥離技術、形状は国府型の特徴を備える。在地の石材を用いた国府系ナイフと呼ぶべき資料である。14~15は台形石器。14は器軸に直交するように剥片の刃縁を横位に用いて、厚みのある打点側のみを折り取る。両側縁には整形剥離が施され、刃縁側は特に入念に調整が行われている。他方、15は側縁を折り取る代わりに成形剥離を施して形を整えた資料である。16~17はサイドスクレイパー。16は不定形剥片の左側縁下端に腹面側から片刃の調整が入れられる。素材の剥片は自然面を背面に残しており、剥片生産の初期に獲得されたものである。18

## 柏田・原ノ久保地区

は石刃。打点部は消失するものの、剥離方向は先行する剥離と同一で、連続的な剥離作業の中で得られた剥片である。19~20は角錐状石器。19は腹面側から側縁に急角度の整形剥離を施して稜を形成する。素材剥片の打点側を基部とし、刃縁側を先端部として尖らせる。甲板面には目立つ調整は施されていない。20は素材剥片の打点周辺を横位に用いる。腹面側から4面、求心的に急角度で整形剥離が行われている。一応の角錐状石器の特徴を備えるものの、背面の基部から稜の頂部にかけては自然面が残り、またその他の調整加工も散漫であるから未成品であろう。21~23は剥片。21はやや大形の剥片で、自然面から直接打撃が加えられる。背面の先行剥離とは加撃方向が直交しており、打面転移の結果生じた剥片である。

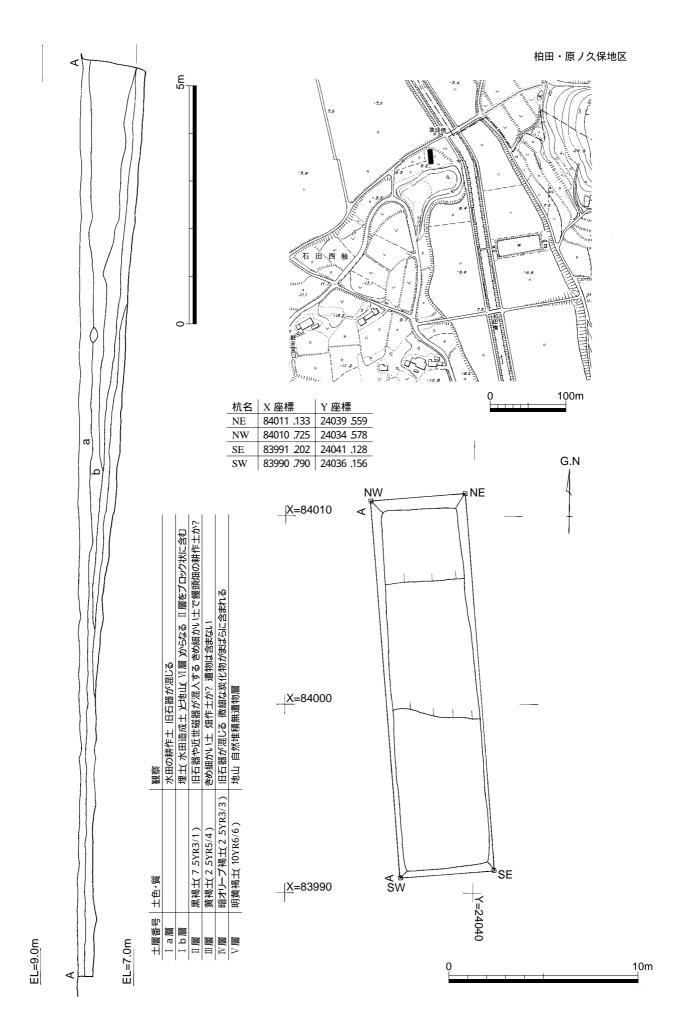


図3 柏田地区 平面図(1/200)土層断面図(1/80)周辺地形図(1/2,500)

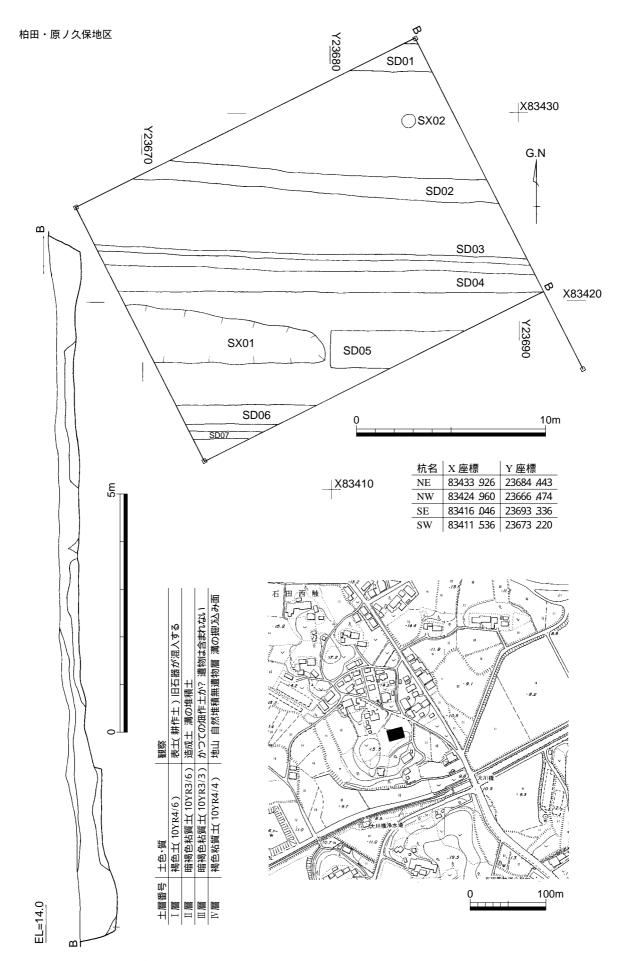


図4 原ノ久保地区 平面図(1/200)土層断面図(1/80)周辺地形図(1/2,500)

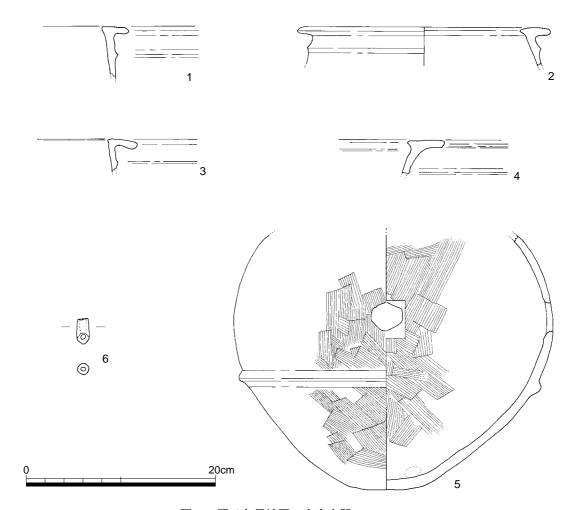


図5 原ノ久保地区 出土土器(1/4)

報告 番号	調査地区調整手法	遺構	層位	色·色相(Hue)外面	色·色相(Hue)内面	胎土 備考	器種 遺物 ID
田与		± 1 ±5 m		1- 7" 1287 EXDE / 4	1- 24 1# 1784 OX TO C 14		
1	原ノ久保	表土採取	-	にぶい褐7 5YR5/4	にいい )更位10YRb/4	長石 石英 金雲母	甕
	外面:ヨコナ	゠゙゚゙゠゙゙				口縁部	201104 015
2	原ノ久保	表土採取	-	橙7 5YR7/6	橙10YR7/6	長石 石英 金雲母	甕
	外面:ヨコナ	デ 内面:	ヨコナデ			口縁部	201104 014
3	原ノ久保	表土採取	-	橙5YR6/6	にぶい橙7 5YR6/4	長石 石英 金雲母	甕
	外面:ヨコナ	デ 内面:	ヨコナデ			口縁部	201104 017
4	原ノ久保	表土採取	-	橙2 5YR6/8	橙2 5YR6/8	長石 石英 金雲母	甕
4	外面:ヨコナ	デ 内面:	ヨコナデ			口縁部	201104 016
5	原ノ久保	SX02	-	橙7 5YR7/6	橙5YR6/8	長石 石英 金雲母	壺
	外面:ハケン	メナデ 内	面:ハケ.	メ ナデ 指オサエ		胴部	201104 021
6	原ノ久保	-	I 層	橙7 5YR7/6	-	長石 石英	土錘
O	-					破片	201104 009

表 1 土器観察表

柏田・原ノ久保地区

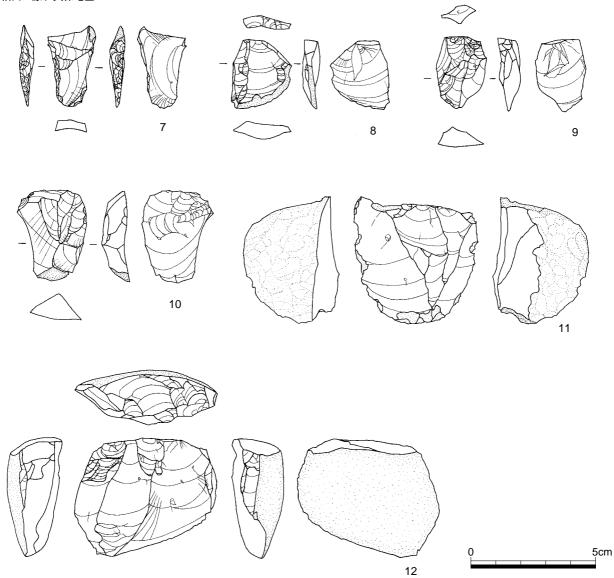


図6 柏田地区 出土石器(2/3)

報告番号	調査地区	遺構	層位	長(m)	幅(mm)	厚( mm )	重量(g)	器種	石材	遺物 ID
7	柏田	-	I層	33	19	6	9 2	台形石器	黒曜石	201104 501
8	柏田	-	I 層	28	24	7	15 .1	剥片	黒曜石	201104 502
9	柏田	-	Ⅱ層	29	20	10	15 2	剥片	黒曜石	201104 505
10	柏田	-	IV層	37	28	10	31 2	剥片	黒曜石	201104 518
11	柏田	-	Ⅱ層	51	50	40	370 .9	石核	黒曜石	201104 532
12	柏田	-	I 層	48	57	22	201 2	石核	黒曜石	201104 508
13	原ノ久保	-	I 層	45	17	7	19 5	ナイフ形石器	黒曜石	201104 520
14	原ノ久保	-	I層	31	21	5	8.8	台形石器	黒曜石	201104 509
15	原ノ久保	-	I層	31	22	8	11 .9	台形石器	黒曜石	201104 514
16	原ノ久保	-	I層	30	20	8	9 2	サイドスクレイパー	黒曜石	201104 515
17	原ノ久保	-	I層	28	11	7	6 .1	サイドスクレイパー	黒曜石	201104 527
18	原ノ久保	-	I 層	24	16	6	6.4	石刃	黒曜石	201104 530
19	原ノ久保	-	I 層	33	18	11	15.3	角錐状石器	黒曜石	201104 525
20	原ノ久保	-	I層	52	26	17	55.3	角錐状石器	黒曜石	201104 513
21	原ノ久保	-	I層	65	45	8	91.9	剥片	黒曜石	201104 510
22	原ノ久保	-	I層	25	23	6	8.8	剥片	黒曜石	201104 528
23	原ノ久保	-	I 層	33	16	6	5 4	剥片	黒曜石	201104 526

表 2 石器観察表

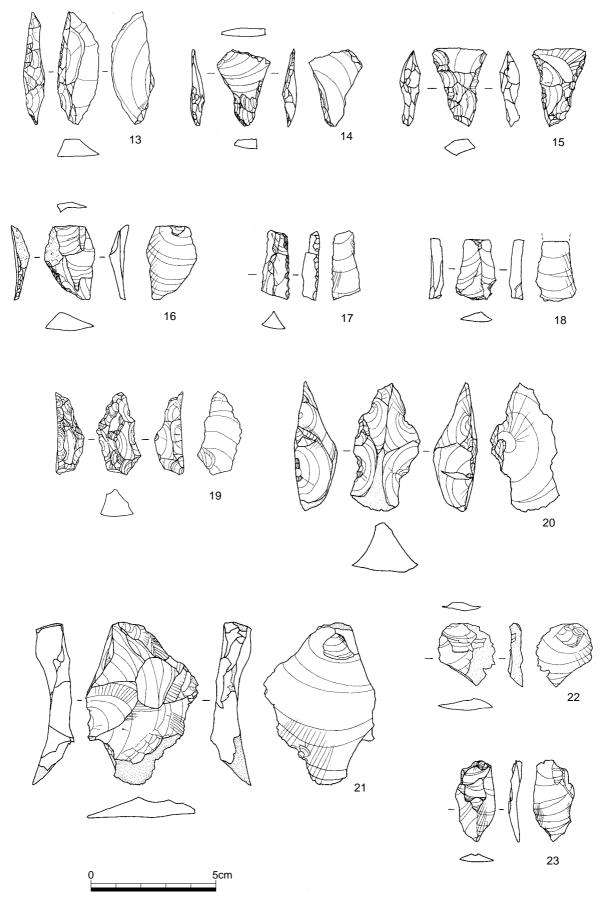


図7 原ノ久保地区 出土石器(2/3)

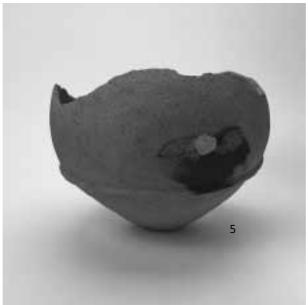




写真 3 出土遺物①

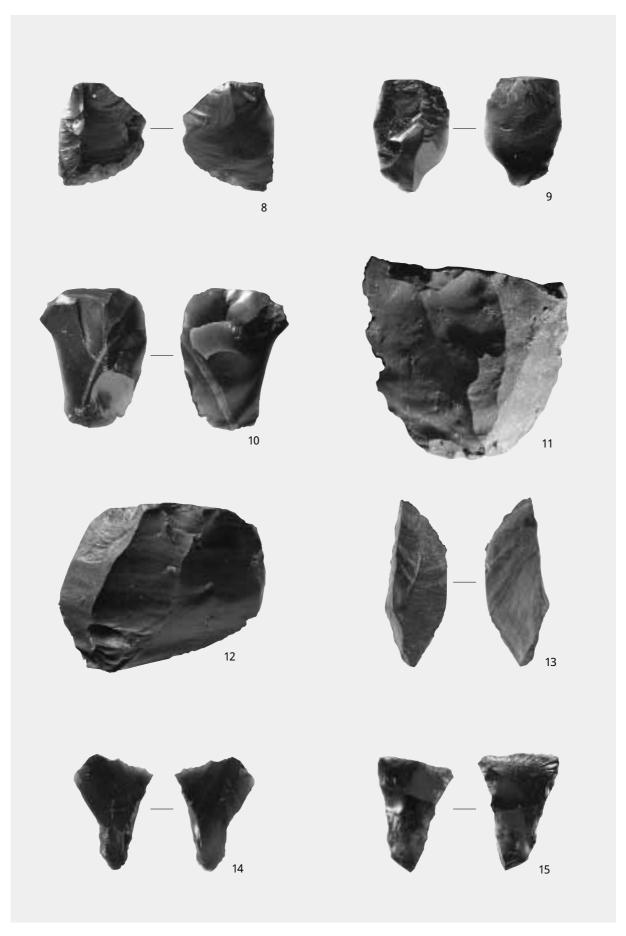


写真 4 出土遺物②



写真 5 出土遺物③



写真 6 柏田地区 地山検出状況



写真7 原ノ久保地区 遺構および地山検出状況

## 3.不條地区

#### (1) 調査概要(図8)

当該地区は,東西方向に10m間隔で排水のための暗渠が設置されており,それをかわすために南北 5 m×東西20mの調査区を 3 箇所,南北 5 m×東西30mの調査区を 1 箇所設定し,1 区から 4 区の番号をつけた。また,長辺が20mおよび30mと長いので調査区の中で半分に分け西側を a 区,東側を b 区(4 区に関しては西側を a 区,中央を b 区,東側を c 区)とした。

調査は,重機を使い表土を除去した後人力で掘削を行った。 1 a 区では,ピット 1 基,自然の落ち込みを検出した。 2 b 区では 1 条の溝とピット 3 基を検出した。 3 a 区では南北方向にのびる河川跡が検出され,その河川跡は 4 a 区と 4 b 区でも確認された。 3 b 区では南北方向にのびる石列および東側に河川跡を確認した。 3 b 区で確認された河川跡は 4 c 区でも検出されたが,石列は検出されなかった。調査は2011(平成23)年10月 7 日から 12月26日まで行った。調査終了後は,掘削面に砂を30 cm程度,敷いた上で埋め戻し,遺構等の保存を講じている。

## (2) 土層(図9~図12)

中世の包含層である1層と弥生時代以前の層位である緑灰粘質土は1~4区の全ての調査区で確認されたものの,弥生時代~中世の包含層については各区で大きく様相が異なるため,調査区ごとに層位認定を行った。

### ①1区

1層: 黄灰色 (2 5Y4/1) 粘質土。にぶい橙色 (7 5YR7/4) 混じり。中世土師器, 同安窯青磁を含む中世の包含層。

2層:にぶい赤褐色(5YR4/3)粘質土。暗赤褐色(10R3/2)混じり。

3層:にぶい褐色(7 5YR5/3)粘質土。橙色(7 5YR6/8)の鉄分が多量に混じる。

4層:黒褐色(7.5YR3/1)粘質土。 3mm程度の砂粒混じり。

5層:灰褐色(10YR5/1)粘質土。

6層: 黒色(7 5YR1.7/1) 粘質土。

7層:黒褐色(10YR3/1)粘質土。6層とともに落ち込み2の覆土。弥生土器含む。

8層: 褐灰色(7 5YR4/1) 粘質土。橙色(7 5YR6/6) 混じり。 1 mm程度の砂粒混じり。

9 層: 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土。橙色 (7 5YR7/6) 混じり。自然木を多く含む。弥生時代以前の無遺物層。

10層: 橙色(7 5YR6/3) 粘質土。黒褐色(7 5YR3/2) 混じり。落ち込み1の覆土。

11層:にぶい褐色(7.5YR6/3)粘質土。

12層:にぶい褐色(7 5YR6/3)粘質土。 1 mm程度の砂粒混じり。

13層:褐灰色(5YR5/1)粘質土。

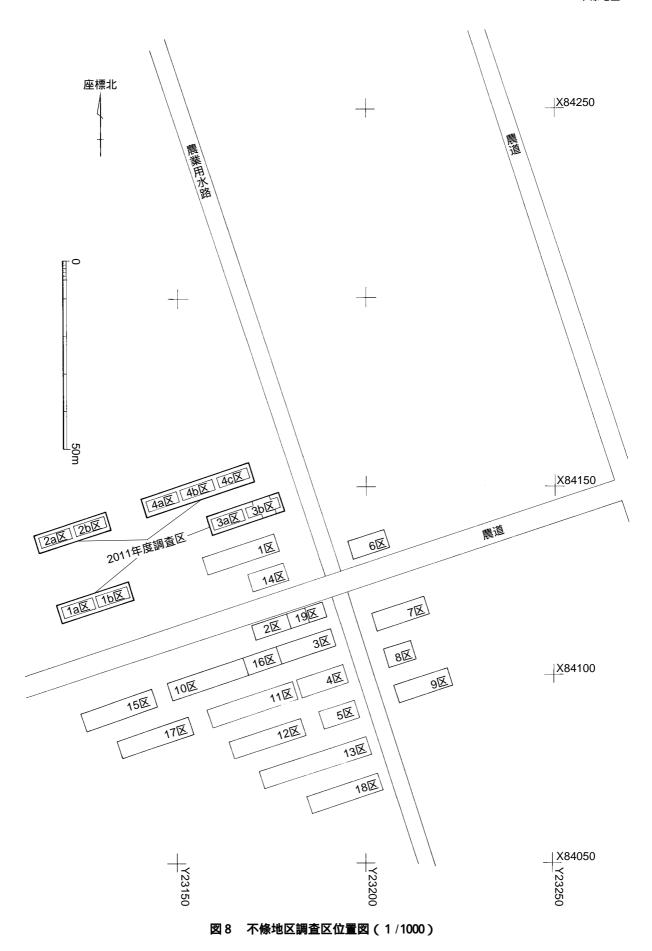
14層:灰色(7.5Y4/1)土。 1 mm程度の砂粒が多く含まれる。弥生時代以前の無遺物層。

#### **2** 2 **X**

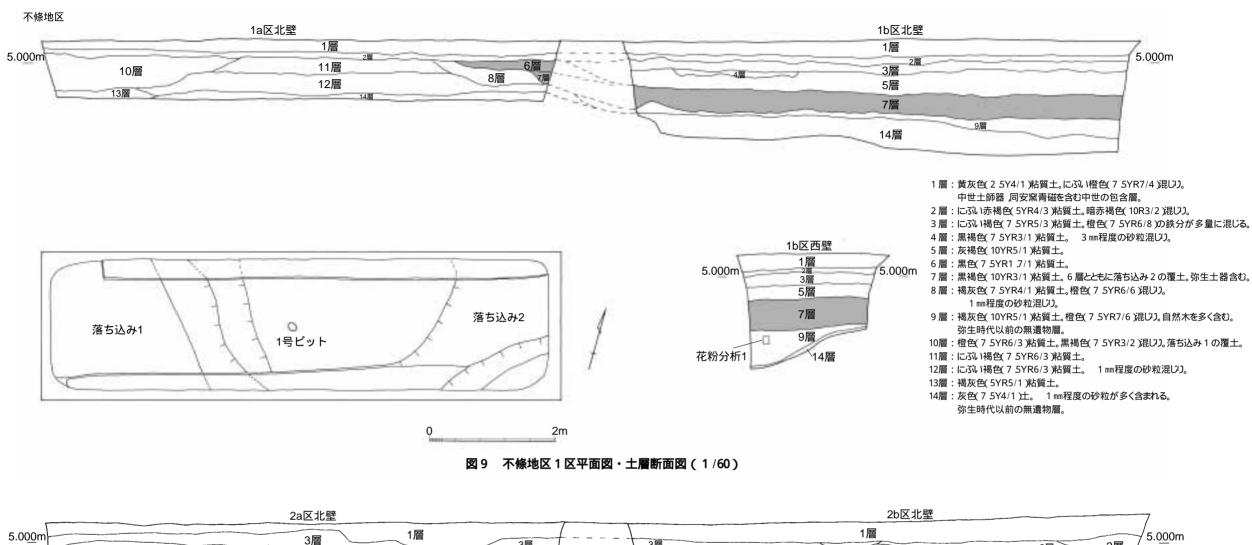
1層:褐灰色(7 5YR4/1)粘質土。

2層:黒褐色(7 5YR3/1)粘質土。橙色(5YR6/8)混じり。

3層:灰褐色(75YR4/2)粘質土。



22



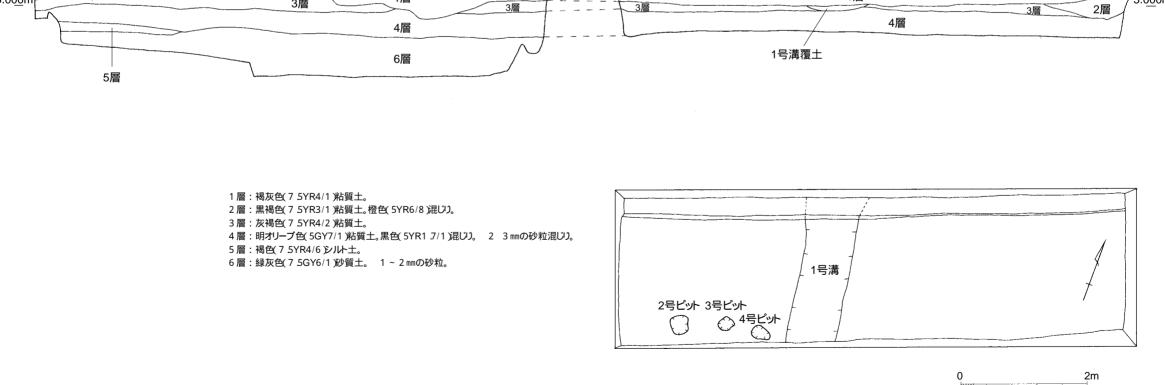
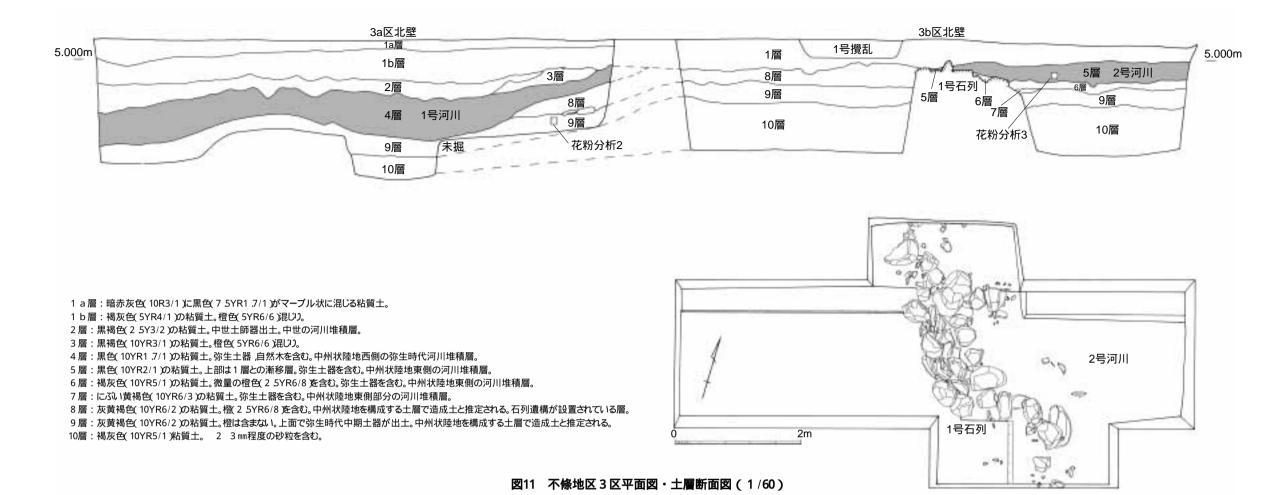
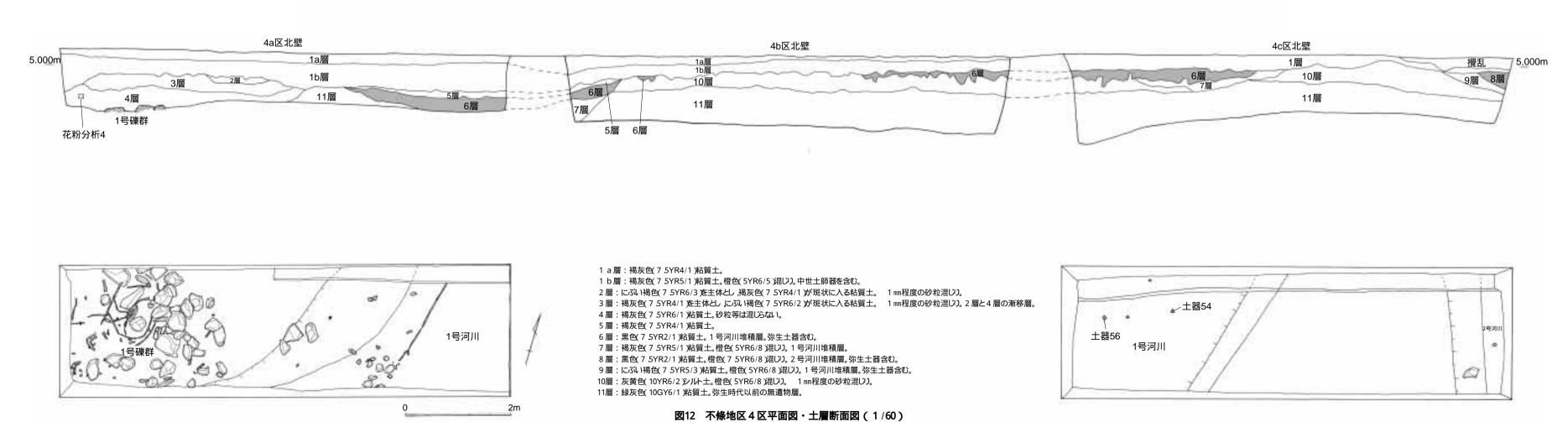


図10 不條地区 2 区平面図・土層断面図 (1/60)





4層:明オリーブ色(5GY7/1)粘質土。黒色(5YR1.7/1)混じり。 2 - 3 mmの砂粒混じり。

5層:褐色(7.5YR4/6)シルト土。

6層:緑灰色(7.5GY6/1)砂質土。 1~2mmの砂粒。

#### ③ 3 **区**

1 a 層:暗赤灰色(10R3/1)に黒色(7 5YR1 7/1)がマーブル状に混じる粘質土。

1 b層: 褐灰色(5YR4/1)の粘質土。橙色(5YR6/6)混じり。

2層:黒褐色(2 5Y3/2)の粘質土。中世土師器出土。中世の河川堆積層。

3層:黒褐色(10YR3/1)の粘質土。橙色(5YR6/6)混じり。

4層: 黒色(10YR1.7/1)の粘質土。弥生土器,自然木を含む。中州状陸地西側の弥生時代河川堆積層。

5層: 黒色(10YR2/1)の粘質土。上部は1層との漸移層。弥生土器を含む。中州状陸地東側の河川 堆積層。

6層:褐灰色(10YR5/1)の粘質土。微量の橙色(2.5YR6/8)を含む。弥生土器を含む。中州状陸 地東側の河川堆積層。

7層:にぶい黄褐色(10YR6/3)の粘質土。弥生土器を含む。中州状陸地東側部分の河川堆積層。

8層:灰黄褐色(10YR6/2)の粘質土。橙(2 5YR6/8)を含む。中州状陸地を構成する土層で造成 土と推定される。石列遺構が設置されている層。

9層:灰黄褐色(10YR6/2)の粘質土。橙は含まない。上面で弥生時代中期土器が出土。中州状陸地 を構成する土層で造成土と推定される。

10層: 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土。 2 - 3 mm程度の砂粒を含む。

# (4) 4 X

1 a 層: 褐灰色 (7 5YR4/1) 粘質土。

1 b層: 褐灰色(7 5YR5/1) 粘質土。橙色(5YR6/5) 混じり。中世土師器を含む。

2層:にぶい褐色(7 5YR6/3)を主体とし,褐灰色(7 5YR4/1)が斑状に入る粘質土。 1 mm程度の砂粒混じり。

3層: 褐灰色 (7 5YR4/1) を主体とし,にぶい褐色 (7 5YR6/2) が斑状に入る粘質土。 1 mm程度 の砂粒混じり。2層と4層の漸移層。

4層: 褐灰色(7 5YR6/1) 粘質土。砂粒等は混じらない。

5層: 褐灰色 (7 5YR4/1) 粘質土。

6層:黒色(75YR2/1)粘質土。1号河川堆積層。弥生土器含む。

7層: 褐灰色 (7 5YR5/1) 粘質土。橙色 (5YR6/8) 混じり。 1 号河川堆積層。

8層: 黒色(75YR2/1) 粘質土。橙色(75YR6/8) 混じり。2号河川堆積層。弥生土器含む。

9層:にぶい褐色(7 5YR5/3)粘質土。橙色(5YR6/8)混じり。1号河川堆積層。弥生土器含む。

10層:灰黄色(10YR6/2)シルト土。橙色(5YR6/8)混じり。 1 mm程度の砂粒混じり。

11層:緑灰色(10GY6/1)粘質土。弥生時代以前の無遺物層。

これまでの船着き場周辺の調査により明らかとなった層位と2011年度不條地区における層位は,地 点や遺構が異なる関係から必ずしも対応するものではないが,土質の特徴等からおおまかな対応関係 を示すと表3のとおりである。

	701-007					370 00
2006( H18 )	2007( H19 )		2011( H	23 )年度		土質
年度	年度	1区	2区	3 区	4 X	】     上貝
	1~2層	1層		1 a 層	1 a 層	近世の水田耕作土
īV	3 屋	2~3屆	1層	1 b ,2 ,	1 b ,2 ,	古代~中世の水田耕作士

7層 14層 4~6層 10層 11層 青灰色(オリーブ)の砂礫層。河床面。

1996( H8 )	2005( H17)	2006( H18 )	2007( H19 )	2011( H23)年度				
年度	年度	年度	年度	1区	2区	3 区	4 X	
	1~2層		1~2層	1層		1 a層	1 a 層	近世の水田耕作土
	3層	IV	3層	2~3層	1層	1 b ,2 , 3層	1 b ,2 , 3 ,4層	古代~中世の水田耕作土。
3層	4層	V	4層	4~8層	2層	4 ,5層	5 ,6 , 7 ,8層	黒褐色で有機質を多く含む。船着き場跡 や河川,濠が埋没する最終段階。
4層	5層	VII	5層			6 ,7層	9層	灰白色で,船着き場跡や河川が埋没する 初期段階。
	6層		6層			8,9層	10層	灰白色で,船着き場跡の基盤層

表3 既往の船着き場周辺調査による層位との対応表

# (3) 遺構(図9~図14)

7層

今回の調査では,石列1基,礫群1箇所,溝1条,ピット4基,河川2条,落ち込み2箇所を確認 した。

# ① 1号石列(図11,13)

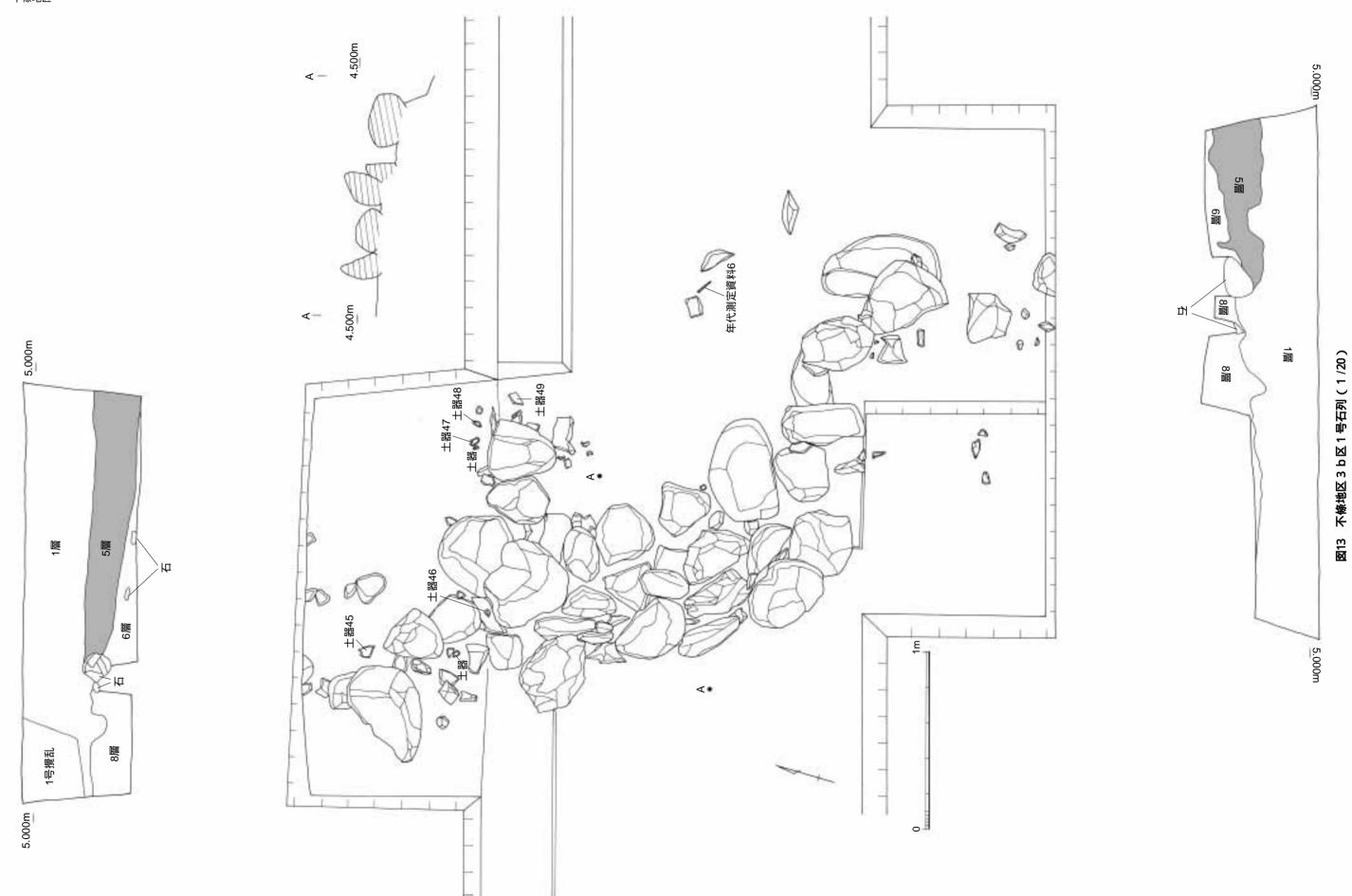
3 b区で検出した。長さ約4 8m , 幅約1 2mで , 主軸は約N42°Wと北西 - 南東方向に延びる。石 列を構成する石は30~50cm程度の玄武岩で,おおむね1段であるが,部分的に石が2段に重なってN るところもある。3列に並んでいる箇所もあるが,南端,北端では配列が崩れている。石列はおおむ ね8層に構築されているが,8層上面より低い位置に位置する石もみられることから,一部は埋置さ れた可能性があるものの,掘方等は確認されていない。また,石列を覆う土層も確認されず,石が露 出した状態であったと考えられる。この石列は北側の延長上に設置された4c区や南側の延長上に設 置された2005(平成17)年度に調査された船着き場跡1区(寺田2007)でも確認されていない。また, 3b区の南北を拡張した結果,南北で石列を構成する礫の大きさが小さくなりほぼ収束する状況で あったため,石列はほぼ3b区南北幅の範囲に構築されているものとみられる。石列が構築された8 層とその下部の9層は水成堆積層ではなく,石列遺構が形成された部分は陸地であったと考えられる が、1号石列の東側で2号河川と接しており、1号石列の位置する陸地は中洲状であったと考えられ る。さらに9層上面から弥生時代中期甕口縁部が出土していることと,8層と9層の土質が類似する ことから中洲状陸地については造成されたものである可能性がある。

#### ②1号礫群(図12,14)

4 a 区で検出した。礫群が配置されている層は調査期間の関係で詳らかにすることはできなかった が、礫群は河川堆積層と推定される4a区4層に覆われている。この4層は古代末~中世の土師器が 出土しており,放射性炭素年代の測定結果も整合的な値(860±20 yrBP)が確認されている。周辺で はこのような礫群が発見されていないことから人為的に配石したものと思われる。礫群は50㎝程度の 大きな礫を配置しており、礫間には多くの自然木が確認された。さらに、シカ下顎骨2点、イノシシ 大腿骨をはじめとする動物骨も検出された。動物骨が礫群の下にもぐりこんでいる箇所もあり、動物 骨の廃棄・流込み後,間もなく礫が配置されたものとみられる。人工遺物としては土師器片等が少量 確認されたのみであるが,土師皿には約2m20m程度の距離で接合したものもある。

## ③ 1号溝(図10)

2b区で検出した。2b区3層および4層を掘りこんでいる。残存幅約80cm , 残存深さはわずか8 cmであり,大部分が中世以降の造成で削平されているものとみられる。覆土は1層で褐色(7.5YR4/



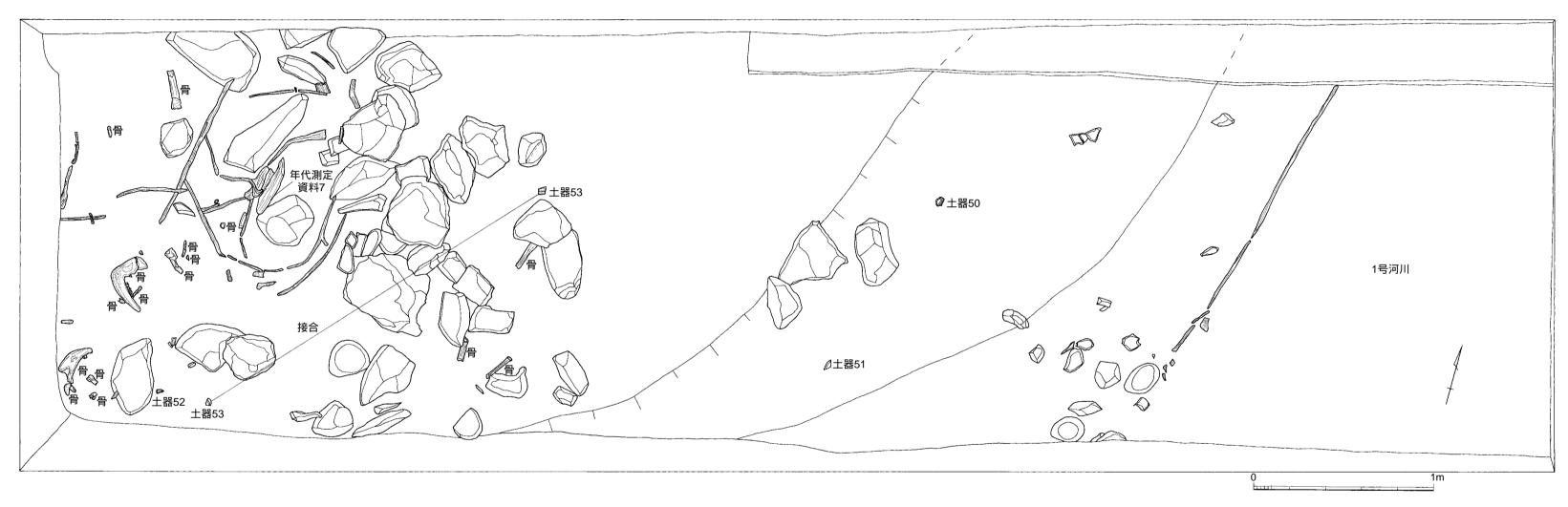


図14 不條地区 4 a 区 1 号礫群 (1/20)

3)の粘質土である。覆土内部の掘削は行わなかった。サブトレンチ内で,溝を截断したところ,覆土中からは遺物は確認されず,時期は不明である。

## ④1号ピット(図9)

1 a 区で検出した。平面は円形で,検出面での直径14cm, 1 a 区 8 層を掘りこんでいる。覆土は暗赤褐色(5YR5/6)の粘質土である。覆土内部の掘削は行わなかった。

## ⑤2号ピット(図10)

2 b区で検出した。平面は不整形で、検出面での直径は約34cm, 2 b区 3 層を掘りこんでいる。覆土は暗褐色(7 5YR3/3)の粘質土である。覆土内部の掘削は行わなかった。

# ⑥3号ピット(図10)

2 b区で検出した。平面は不整形で,検出面での直径は約26cm , 2 b区 3 層を掘りこんでいる。覆土は暗褐色 (7 5YR3/4) の粘質土である。覆土内部の掘削は行わなかった。

#### ⑦4号ピット(図10)

2 b 区で検出した。平面は不整形で,検出面での長径は約30cm , 2 b 区 3 層を掘りこんでいる。覆土は褐灰色 (5YR4/1) の粘質土である。覆土内部の掘削は行わなかった。

#### ⑧ 1 号河川(図11,12)

3 a 区と4 a 区東側,4 b 区,4 c 区西側で検出した。3 a 区の5 層黒色粘質土と4 区の6 層黒色粘質土が河川堆積層で,その直下の4 区 7 層は河床形成面であると考えられる。3 a 区 2 層からは中世土師器,3 a 区 3 層からは古代須恵器,中世土器が出土し,3 a 区 4 層からは弥生時代中期及び後期の土器片を主体とする遺物が出土している。このことから河川堆積土は大きく下層(3 a 区 4 層)と上層(3 a 区 3 層・2 層)に分離され,弥生時代中期から後期にかけて埋没した後,やや窪んだ旧地形に古代から中世にかけて再度土層が堆積したものとみられる。河床面の中央が盛り上っているのが,3 a 区と4 b 区で観察され,流路が分離していた可能性もある。なお4 b 区中央で6 層がとぎれているのは,後世の造成によるものであると考えられる。4 a 区東側では河川の西岸が検出されたが,30cm程度の玄武岩が数点配石されていた。

## ⑨ 2号河川(図11,12)

3 b 区東側と4 c 区東側で検出した。 3 b 区 5 層黒色粘質土と4 c 区 8 層黒色粘質土が河川堆積層で,その直下の3 b 区 6 層・7 層及び4 c 区 9 層は河床形成面であると考えられる。河川堆積層からは弥生時代中期の土器片を主体とする遺物が出土しているが,3 b 区 5 層では古墳時代初頭の甕胴部片が1点出土している。このことから,2 号河川は弥生時代中期に埋没が始まり,一部は古墳時代初頭まで埋没が継続したものと考えられる。なお,2 号河川の堆積土である 3 b 区 5 層で出土した木片に対する放射性炭素測定値は1090 ± 30 yrBPを示し,おおむね古代の年代であるが,3 区及び 4 区では,古代・中世の層から打ち込まれた杭等が複数確認されており,測定を行った木材がこれらの杭であった可能性や造成時に下層へ落ちたものである可能性がある。3 b 区では 1 号石列を境界に河川堆積層はなく,1 号石列より西側は中洲状の陸地であったと考えられるが,同様の陸地は 4 a 区でも確認されることから,1 号河川と 2 号河川は 3 区の南側及び 4 区の北側で合流し,一つの河川であったものと推定される。

#### 不條地区

# ⑩落ち込み1(図9)

1 a 区西側で検出した。 1 区12~11層を切っており,西側に向かって落ち込んでいる。10層は落ち込みの埋土である。遺物は包含されていなかった。

# ①落ち込み2(図9)

1 a 区東側と1 b 区で検出した。1 区14層が底面にあたり,1 b 区西壁によく示されているとおり, 南側に大きく落ち込んでいる。この落ち込みには3~9層が堆積している。このうち7層では弥生土 器片が多数出土しており弥生時代の堆積層であると考えられる。9層では自然木が多数出土したが, 弥生土器等の人工遺物は検出されず,弥生時代以前の無遺物層である。9層出土の自然木に対する放 射性炭素年代測定値(2530±30 yrBP)とも整合的である。

#### ① **1 号攪乱**(図11)

3 b区で平面不整形の攪乱が検出されたが,この攪乱下面では清涼飲料水金属缶(日本コカ・コーラ株式会社販売「紅茶花伝ロイヤルミルクティー」280g)が出土した(写真 8 )。この清涼飲料水金属缶は扁平につぶれ腐食のため製造年月日の記載が読み取れなかったため,日本コカ・コーラ株式会社宛て文書照会を行ったところパッケージの形状から1996年6月中旬頃~2000年4月頃に製造された製品であるとの回答が得られた。この地域における圃場整備に伴う工事は船着き場跡の調査直後の1996年に開始されており年代上合致することから,この工事による攪乱であることが判明した。



写真8 1号攪乱出土清涼飲料水金属缶

# (4) 遺物

#### 1) 土器

# 1 b区出土土器

# 1層土器(図15・表4)

24は中国青磁皿である。復元口径は10 8cm,高さ2.1cmを測る。見込みに櫛描文が施文される同安 窯系青磁である。25は中世土師皿である。復元底径は11.0cmを測る。

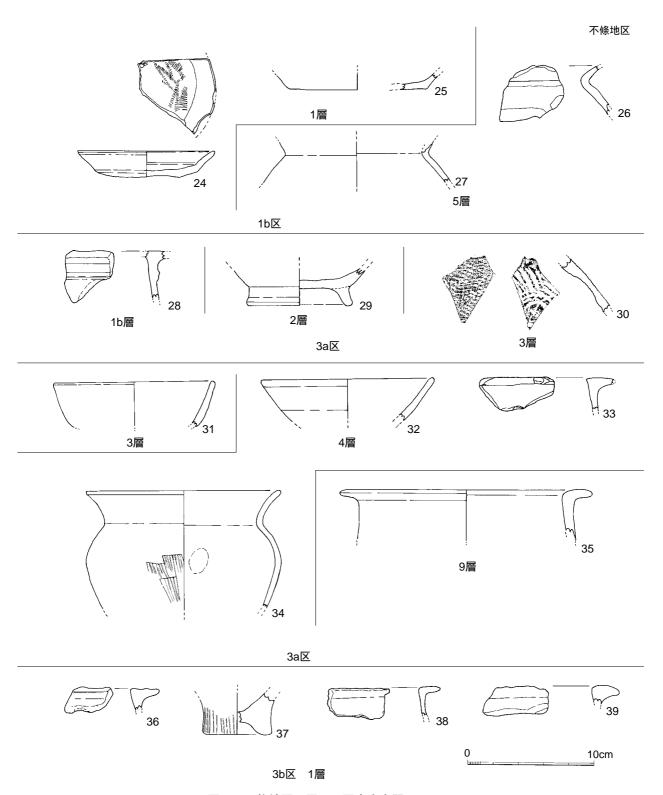


図15 不條地区1区・3区出土土器(1/3)

# 2号落ち込み堆積土(5層)土器(図15・表4)

26は弥生時代後期の短頸壺の口縁部である。磨耗が甚だしい。27は弥生時代後期の甕の頸部片である。磨耗が甚だしい。

# 3 a 区出土土器

# **1 b層土器**(図15・表4)

28は弥生時代中期の甕口縁部である。断面M字状突帯がめぐり,内外面および口縁頂部に赤塗りが

不條地区

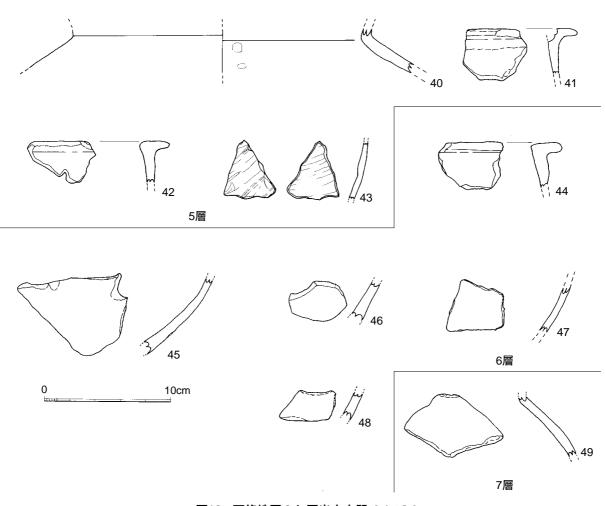


図16 不條地区3 b区出土土器(1/3)

施される。須玖Ⅱ式である。

# 1号河川古代・中世堆積土(2層)土器(図15・表4)

29は古代土師碗高台部である。底径は8 Ocmを測る。標高4 513mで出土した。

# 1号河川古代堆積土(3層)土器(図15・表4)

30は古墳時代末~古代の須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキが施され,内面は同心円状の当て具痕が残る。31は古代の土師碗口縁部である。復元口径は12 5cmを測る。外面及び口唇部は黒色のススを吸着させている。

# 1号河川弥生時代堆積土(4層)土器(図15・表4)

32は古代~中世土師坏口縁部である。復元口径は13 5cmを測る。 2 層または 3 層からの流れ込みと考えられる。33は弥生時代中期の甕口縁部である。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。標高4 .172m で出土した。34は弥生時代後期の甕口縁部である。復元口径は15 2cmで,緩やかに傾斜する口縁部を持つ。胴部外面には縦位の八ケメ調整が施され,内面はナデ調整である。標高4 249mで,口縁部を下に伏せられたような状態で出土した。

# 9層土器(図15・表4)

35は弥生時代中期の甕口縁部である。復元口径は18.6cmである。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。 標高4.163m,9層上面で出土した。

不條地区

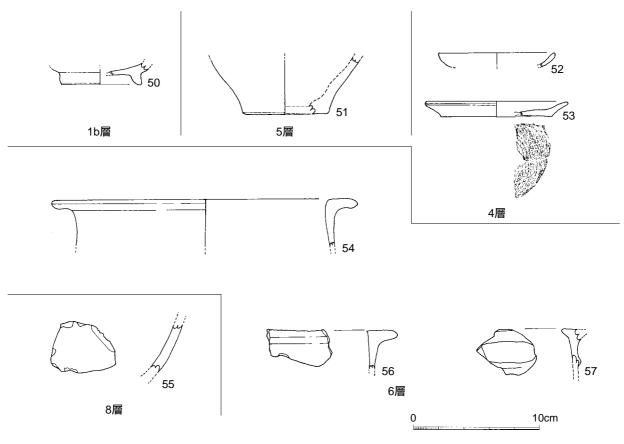


図17 不條地区4区出土土器(1/3)

# 3 b区出土土器

# 1層土器(図15・表4)

36は弥生時代中期の甕口縁部である。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。37は弥生時代中期の底部 片である。外面は縦位のハケメ調整が施され,内面はナデ調整である。凹底で,底径は5 4cmである。 須玖 I 式である。38は弥生時代中期の甕口縁部である。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。39は弥生 時代中期の甕口縁部である。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。

# 2号河川弥生時代堆積土(5層)土器(図16・表4)

40は弥生時代中期の壺肩部である。内外面とも丁寧なナデ調整である。41は弥生時代中期の甕口縁部である。口縁部と頸部の境界に強いナデ調整がみられる。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。42は弥生時代中期の甕口縁部である。口縁部と頸部の境界に強いナデ調整がみられる。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。41と同一個体である可能性がある。43は古墳時代初頭の甕胴部片である。外面はハケメ調整後,黒色のススを付着させている。内面にはヘラケズリにより器壁を薄くしているのが観察される。

# 2号河川弥生時代堆積土(6層)土器(図16・表4)

44は弥生時代中期の甕口縁部である。口縁部と頸部の境界に強いナデ調整がみられる。須玖 I 式である。磨耗が甚だしい。45は弥生時代中期の壺胴部片である。内外面ともナデ調整が施される。磨耗が甚だしい。標高4.719mで出土した。46は弥生土器甕の底部に近い胴部片である。磨耗が甚だしい。標高4.847mで出土した。47は弥生土器胴部片である。磨耗が甚だしい。標高4.557mで出土した。48

表4 遺物観察表(土器・陶磁器)

報告番号	遺物ID	調査区	層位遺構)	種類	部位	色調	(表)	色調	裏)	胎士	調整表)	調整裏)	備考
24	201104 023	不像16区	_ m	青磁皿		灰オリーブ	7 5Y6/2	オリーブ灰	2 5GY6/1				櫛描文 同安窯
25	201104 024	不像16区	- 画	中世士師目	胴部	橙	7 5YR7/6	罄	7 5YR7/6	精良	不明	不明	
56	201104 028	不像16区	5 圖	弥生土器壺	頸部	灰黄	2 5Y7/2	こぶい	7 5YR7/4	石英・長石	ナボ	ナボ	
27	201104 030	不像16区	5 画	弥生土器甕	口緣部	にぶば	2 5Y6/3	こぶい黄	2 5Y6/3	石英·長石	ナボ	ナボ	
78	201104 036	不條3a区	1 b 層	弥生中期甕	□縁部	明赤褐	2 5YR5/8	こぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石	ナボ	ナギ	内外面赤塗) 須玖 🛚 式
53	201104 037	不條3 a 区	2層	中世土師碗	画	灰黄	2 5Y7/2	灰黄	2 5Y7/2	長石	ĵk †	ナボ	
30	201104 038	不條3 a区	3團	古代須恵器	頸部附近胴部	校白	/ZN	灰白	/ZN	長石	平行99年	同心円 当て具痕	
31	201104 040	不條3 a 区	3 國	中世十師弼	口緣部	畫	7 5YR2/1	灰黄褐	10YR6/2	石英·長石	ĵk †	ナボ	外面黒スス
32	201104 042	不條3 a 区	4 層	中世十部船	口縁部	に/SJ / M巻	7 5YR7/4	に/Sit /楢	7 5YR7/4	長石·角閃石	ドナ	ナギ	
33	201104 044	不條3 a 区	4 層	弥生中期甕	□縁部	浅黄	2 5YR7/4	浅黄	2 5YR7/4	石英·長石	ナボ	ナイ	須玖 I 式
¥	201104 045	不條3 a区	4 層	弥生後期甕	口縁部・胴部	にぶい	2 5Y6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石	(口縁)ナデ・ (間)ハケメ	コビオサエ・ ナデ	後期
35	201104 046	不條3a区	9 圖	弥生中期甕	□縁部	にぶり黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石		ナギ	須玖 I 式
36	201104 047	不條3b区	1 画	弥生中期甕	口緣部	こぶ、黄	2 5Y6/4	にぶい黄	2 5Y6/4	石英·長石·金雲母		ナデ	須玖 I 式
37	201104 048	不條36区	— 画	弥生中期甕	底部	橙	5YR6/4	こぶい黄	2 5YR6/3	石英·長石	ハケメ	ナボ	須玖 I 式
88	201104 049	不條36区	- 画	弥生中期甕	口緣部	汝	5Y6/1	明黄褐	2 5Y7/6	石英·長石	ĵk †	ナギ	須玖 I 式
33	201104 050	不條36区	一 画	弥生中期甕	□縁部	魯	5YR6/6	浅黄	2 5Y7/4	石英·長石	ĵk †	ナボ	須玖 I 式
40	201104 056	不條36区	5 画	弥生中期壺	肩部	にぶり黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石	ナボ	ナデ	
41	201104 057	不條36区	5 圖	弥生中期甕	口緣部	浅黄	2 5Y7/3	明黄褐	10YR7/6	長石·石英	ナボ	ナボ	須玖 I 式
42	201104 058	不條3b区	5層	弥生中期甕	口緣部	浅黄	2 5Y7/3	浅黄	2 5Y7/3	石英・長石	ナデ	ナデ	須玖 I 式
43	201104 059	不條36区	5 画	古墳土師甕	胴部	こぶ、遺	2 5Y6/4	浅黄	2 5Y7/4	石英·長石·角閃石	ハケメ	ヘラケズリ	外面黒スス
4	201104 065	不像36区	國 9	弥生中期甕	□縁部	灰オリーブ	5Y6/2	灰オリーブ	5Y5/3	石英·長石·金雲母	ナボ	ナギ	須玖 I 式
45	201104 067	不條36区	國 9	弥生土器	胴部	オリーブ黒	5Y3/1	にぶい黄橙	10YR6/4	長石·石英			3 b 区土器 1
46	201104 068	不條3b区	量 9	弥生土器甕	胴部	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石			3 b 区土器 3
47	201104 070	不條36区	國 9	弥生土器	胴部	橙	7 5YR6/6	橙	7 5YR6/6	石英・長石			3 b 区土器 5
48	201104 071	不條3b区	9	弥生土器	胴部	にぶい赤褐	5YR5/4	黄灰	2 5Y5/1	石英・長石			3 b 区土器 6
49	201104 072	不條3b区	7 厘	弥生土器壺	肩部	橙	7 5YR6/6	聲	7 5YR6/6	石英·長石		コビオサエ	3 b 区土器 7
20	201104 075	不條4a区	1 b層	中世上師碗	画品	にぶば	10YR7/2	にぶい橙	7 5YR7/3	精良	ナデ	ナデ	4 a 区土器 3
51	201104 077	不條4a区	2 層	弥生中期甕	底部	橙	7 5YR6/6	にぶい黄	2 5Y6/3	石英・長石			須玖 I 式
52	201104 078	不條4 a区	4層	中世士師目	口緣部	オリーブ黒	10Y3/2	オリーブ黒	7 5Y3/1	精良	ナボ	ナデ	
ជ	070 101100	100円を	Ē	日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	□缘部。底部	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10TR6/4	1 計	۱۱ <del>۱</del>	۱۱ <del>۱</del>	回群名 til) 每今淡彩
2	6/0 401107	マット マット マット マット マット マット マット マット マット マット			工练吗,压吗	灰オリーブ	5Y5/2	灰オリーブ	5Y5/2	以即		7.7	凹毛が がしが 女口 貝付
72	201104 085	不條4 c 区	國 9	弥生中期甕	口緣部	椌	7 5YR6/6	塑	7 5YR6/6	石英・長石	ナボ	ナボ	須玖 I 式
55	201104 082	不條4 c 区	8 圖	弥生土器	胴部	こぶ、黄	2 5Y6/4	黒褐	2 5Y4/1	石英·長石			
26	201104 088	不條4c区	壘 9	弥生中期甕	口緣部	明黄褐	10YR7/6	黄橙	7 5YR7/8	石英·長石	ナボ	ナボ	須玖 I 式
57	201104 089	不條4c区	9屋	弥生中期甕	口緣部	にぶり黄褐	10YR5/4	灰黄	2 5Y6/2	石英・長石	ナデ	ナデ	

は弥生土器胴部片である。磨耗が甚だしい。標高4 565mで出土した。

# 2号河川弥生時代堆積土(7層)土器(図16・表4)

49は弥生土器壺の頸部附近の胴部片である。磨耗が甚だしいが,内面にユビオサエ痕がみられる。 標高4.563mで出土した。

# 4 a 区出土土器

# 1 b層土器 (図17・表4)

50は古代土師碗の高台部である。復元底径は6.1cmである。内外面ともナデ調整である。標高4.610mで出土した。

# 4層土器(図17・表4)

52は古代土師皿口縁部である。復元口径は9 2cmである。黒色土器で,内外面回転ナデ調整が施される。標高4 .046mで出土した。53は古代末~中世土師皿である。復元口径11 .1cm,復元底径8 .8cm,高さ1 .2cmである。胴部外面及び内面は回転ナデ調整で,底部は回転糸切り痕が残る。本資料は接合資料で,1号礫群東側と西側で約2 .2m離れた位置で出土しており,東側の個体の出土位置は標高4 .004mである。

# 1号河川弥生時代堆積土(5層)土器(図17・表4)

51は弥生時代中期甕の底部である。復元底径は6.8cmである。磨耗が甚だしく,内面は剥離している。標高4.470mで出土した。

#### 4 c 区出土土器

# 1号河川弥生時代堆積土(6層)土器(図17・表4)

54は弥生時代中期甕の口縁部である。復元口径は24 2cmである。須玖 I 式である。標高4 855mで出土した。56は弥生時代中期甕の口縁部である。磨耗が甚だしく,内面は剥離している。須玖 I 式である。標高5 339mで出土した。57は弥生時代中期甕の口縁部である。口縁下部に1条の突帯がめぐる。磨耗が甚だしい。

# 2号河川弥生時代堆積土(8層)土器(図17・表4)

55は弥生土器胴部片である。磨耗が甚だしい。

### ②木器(図18・図19・表5)

58~63は木杭である。58は3 a 区 2 層上面から打ち込まれており,先端は4 層に達していた。59~63は4 a 区 4 層で出土したが,打ち込まれた面は確認できなかった。このほか4 a 区では1 層から打ち込まれた木杭も確認され,中世を中心に木杭が打ち込まれた様相を看取することができる。

遺物番号	遺物 ID	調査区	層位	種類	長さ(残存値)cm	最大径cm
58	201104 801	不條3a区	2層上面	木杭	(24.2)	4 2
59	201104 802	不條4a区	4層	木杭	(22 5)	2.7
60	201104 803	不條4a区	4層	木杭	(19.9)	5.9
61	201104 804	不條4a区	4層	木杭	(44.5)	5 <i>A</i>
62	201104 805	不條4a区	4層	木杭	(36.7)	4 2
63	201104 806	不條4a区	4層	木杭	(11.8)	2.5

表 5 遺物観察表(木器)

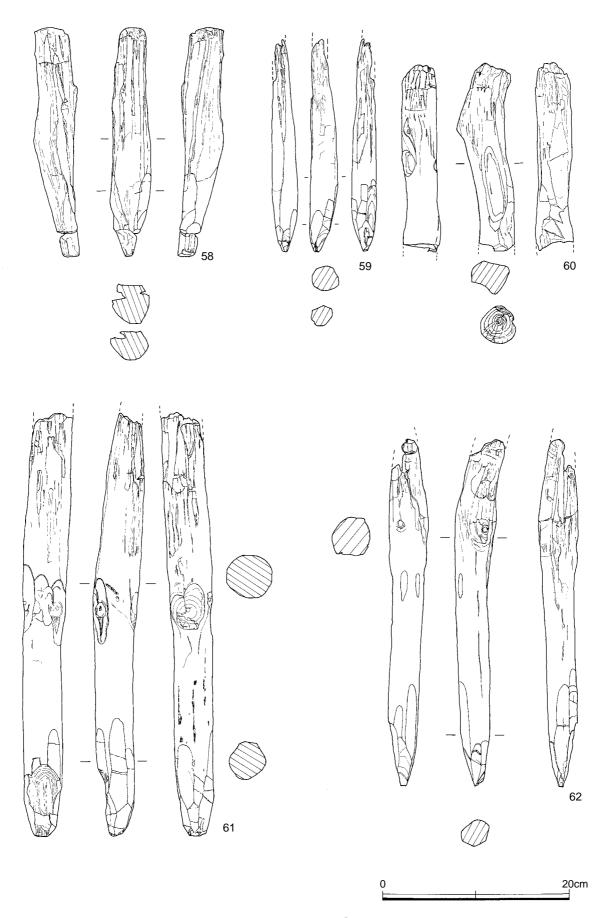


図18 不條地区出土木器① (1/4)

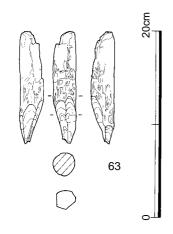


図19 不條地区出土木器② (1/4)

## (5) 1号石列について

#### ①石列の年代

遺構の項目で触れたように1号石列は1号河川と2号河川にはさまれた中洲状の陸地の東岸に位置する。3区における層位との関係を基に1号石列の年代について考察すると次のとおりである。3b区における堆積・形成順序は10層 9層(中洲状陸地構成土) 8層(中洲状陸地造成土) 石列遺構 7層(2号河川堆積土) 6層(2号河川堆積土) 5層(2号河川堆積土) 1層(中世土層)となる。3a区では石列構築以前の9層上面から弥生時代中期の甕口縁部(35)が出土している。1号石列構築後の2号河川による水成堆積層であるとみられる5~7層からは弥生時代中期の遺物が主体的に出土し(40~42),1点のみ古墳時代初頭の甕胴部片(43)が出土することから

2号河川の埋没は弥生時代中期を主とし,一部は古墳時代初頭まで継続したものとみられる。このような層序関係から,1号石列が構築された年代は弥生時代中期であると考えられる。

#### ②これまで確認された遺構との関係と石列の性格(図20)

これまでの船着き場周辺の発掘調査及びボーリング調査から島状の船着き場に対して幅40m程度の河川が流れ込んでいるという様相が想定されてきた(林2008)。これに,2011年度の不條地区の調査成果を加えると図20のような状況が想定される。従来,船着き場より北側の河川流路はやや東に触れるものと想定されてきたが,流路がやや西よりとなり,ほぼ北へ直行しているものと考えられる。さらにその河川の中に中洲状の陸地があり,その陸地に1号石列が構築されているという様相が明らかとなった。1号石列の範囲は中洲状陸地東岸の3b区が設定された範囲にほぼ限定され,船着き場と連結することはない。また,1号石列を構成する礫は船着き場を構成する礫よりもやや大きいという特徴がある。これらの点から1号石列と船着き場を同一の遺構とみることはできない。しかし,1号石列と船着き場が構築・使用された年代はほぼ同一時期で,かつ1号石列は船着き場に流れ込む河川に接して築かれた点を勘案すると船着き場と全く無関係の遺構とすることも難しい。中洲状陸地に部分的に築かれた1号石列にある程度の護岸機能を想定するならば,船着き場に通ずる河川のための水利施設という可能性を考えるのが最も妥当であろう。

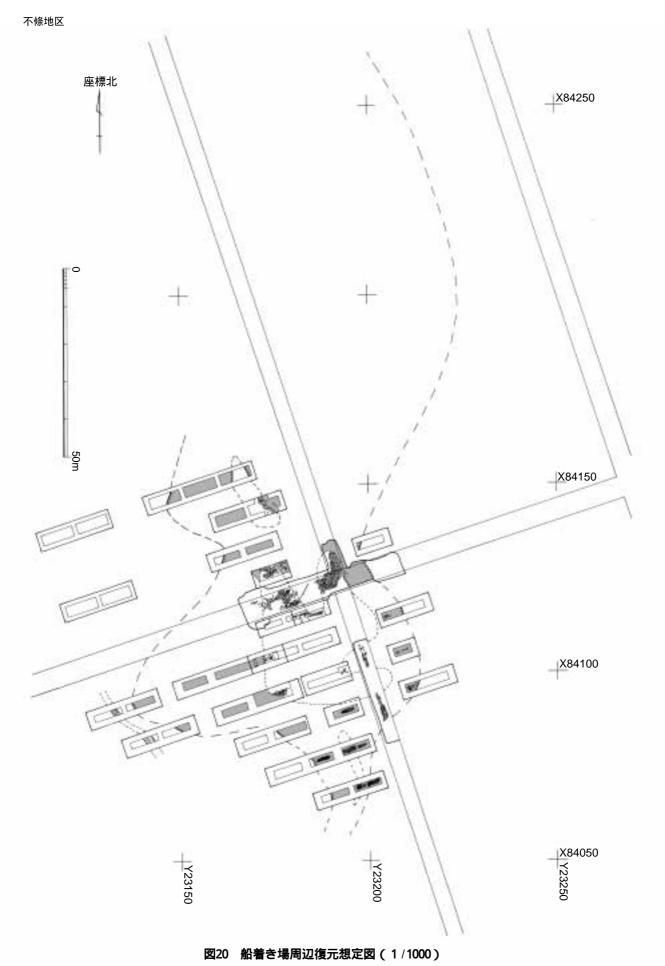
#### (6) 総括

# 2011年度調査不條地区の時期的変遷について

これまで述べた遺構・遺物等の在り方から2011年度調査不條地区の時期的変遷について整理すると次のとおりである。

# ①縄文時代晩期~弥生時代早期

調査区南西部の1 b区では落ち込み2 がみられ,自然木が多量に埋没していたことから湿地状の沼地が存在したものとみられる。この時期の堆積層である灰色粘質土と類似した土壌は調査区の西側に現在,開削されているため池の東岸露頭でも確認される。この露頭では標高3.791mを上面とする灰色粘質土がみられるが(図21),1区9層の上面が標高4.140~4.220m,下面が標高3.780~4.221m



灰色は河川堆積層が確認された部分

であることと比較すると、ため池露頭灰色粘質土と1区9層が同一の土層であった場合、調査区から西側にかけて約40cm程度落ち込んでいくという状況となる。1区9層からは遺存状態が非常に悪いものの木本花粉ではマキ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイ属、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属等が認められる。この時期の遺物は確認されておらず、積極的な土地利用はなされていないと考えられる。

# ②弥生時代中期

調査区東側の3区と4区では1号河川と2号河川が流れており、両河川にはさまれた中洲状陸地が存在する。この中洲状陸地は造成されたものである可能性がある。そしてこの中洲状陸地の東岸では1号石列が築かれる。1号河川と2号河川は

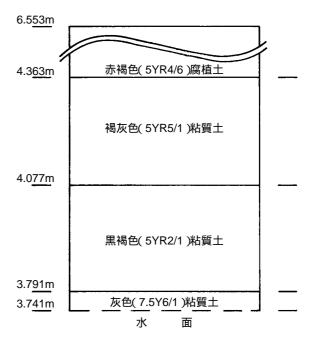


図21 ため池東岸土層図(1/10)

この時期から埋没が始まる。2011年度の調査における出土遺物の中で最も多くの遺物が属するのが弥生時代中期であることから,ある程度の土地利用を想定することができる。遺物はおおむね河川堆積層から出土しており,1号石列を除いて明確な遺構が発見されなかったため,具体的な土地利用の様態について詳らかにすることはできないが,1号石列の存在から河川と関連した活動がなされたものとみられる。2号河川周辺の植生としては河川堆積土である3区5層における花粉化石は木本花粉ではアカガシ亜属が多く,草本花粉ではイネ科が多く,ほかにガマ属,ミクリ属等の水湿地生植物も認められ,河川岸の植生をよく示している。

## ③弥生時代後期・古墳時代初頭

この時期にも1号河川と2号河川の堆積層から少量ながら弥生時代後期土器が出土することから, この時期にも両河川の埋没が継続していることがわかる。この時期には1号石列はほぼ埋没しており, その機能を失っていたと考えられる。

この時期にも調査区南西側の2号落ち込みの埋没が継続していることが,堆積層から出土する弥生時代後期の土器から窺われる。2号落ち込みにおける弥生時代後期の埋没土である黒色粘質土と同様の土質である黒色粘質土は調査区の西側に現在,開削されているため池の東岸露頭でも確認される。この露頭では標高4.077mを上面とし,標高3.791mを下面とする黒褐色粘質土がみられるが(図21),1区10層の上面が標高4.600~4.680m,下面が標高4.140~4.240mであることと比較すると,ため池露頭黒褐色粘質土と1区8層が同一の土層であった場合,調査区から西側にかけて約40cm程度落ち込んでいくという状況となる。

# ③古代~中世

この時期の遺構としては1号礫群が挙げられる。1号礫群では少量の人工遺物と獣骨,多量の自然 木が発見されている。礫群が設置された面は落ち込んでいることから自然の落ち込みに対して何らか の活動がなされたものと考えられる。1号礫群の覆土である4区4層では木本花粉化石としてはマツ

#### 不條地区

属が多産し、草本花粉化石としてはイネ科が多産するが、栽培種であるソバ属花粉もわずかに認められるのは注目される。また、この時期にも1号河川の埋没が継続していることが上層堆積層からの出土遺物から窺うことができる。

1号礫群等が利用された時期の次の段階としては,調査区全域で中世の堆積層である1層が標高5000mを中心に形成されていることから,大規模な土地造成があったものとみられる。3区および4区で複数の木杭が確認されており,1層の形成と前後する時期の土地造成の目的は農業等であったものとみられる。

# 2011年度調査不條地区の調査成果

2011年度の不條地区の調査の成果としては,①船着き場跡に流れ込む河川の流路や埋没状況の確認, ②船着き場跡の周辺に所在する重要遺構としての1号石列の発見,③1号礫群に顕著にみられる古 代・中世における当該地の土地利用様相の確認等が挙げられる。これらの成果により今後,史跡整備 にあたって基礎的な資料を提示したという点に本調査の意義がある。

# 【油文】

寺田正剛 2007「3.船着き場跡(不條地区)の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第 36集

林隆広 2008「3.不條地区(船着き場跡)の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第38 集

		X	Y
	北西杭	84118 297	23118 <i>4</i> 15
1区	南西杭	84113 561	23120 .023
	南東杭	84120 .010	23138 .961
	北東杭	84124 .741	23137 351
	北西杭	84137 260	23111 989
2区	南西杭	84132 526	23113 592
212	南東杭	84138 961	23132 544
	北東杭	84143 .692	23130 .932
	北西杭	84142 255	23157 .838
3 ⊠	南西杭	84137 513	23159 <i>4</i> 40
3 🗠	南東杭	84143 945	23178 358
	北東杭	84148 .673	23176 .750
4 57	北西杭	84146 .866	23140 397
	南西杭	84142 .124	23142 .042
4 🗵	南東杭	84151 .802	23170 <i>A</i> 18
	北東杭	84156 538	23168 .807

表 6 不條地区調査区地点一覧

# 2011年度原之辻遗址不条地区发掘调查成果

2011 年 10 月 7 日~12 月 26 日,以土地利用状况为目的,对原之迁遗址西侧低地处进行了发掘调查。 发掘调查区域为, 南北  $5m \times$  东西 20m 的 3 个区域, 和南北  $5m \times$  东西 30m 的一个区域, 并将其编号 分 1 区到 4 区。此外,又以长 20m、30m 为单位将调查区分为两半,西侧分为 a 区,东侧分为 b 区(4 区的区分为西侧为 a 区,中央为 b 区,东侧为 c 区)。这个调查区域的南侧是弥生时代中期码头遗址的发现地。

发掘调查结果,发现了石头排列群 1 个,碎石群 1 个,沟 1 条,沙坑 4 个,河流 2 条等。至今为止,认为流向码头遗址的河流宽 40m,但是根据 3 区、4 区的调查发现河流是被一分为二的,中间有岛状陆地。 1 号石头排列群是在 3b 区的 2 号河流东岸,从出土的遗物和土层堆积来看属于弥生时代中期。这个石头排列群和南侧的码头遗址并不连接,所以并不属于同一遗址结构。1 号石头排列群和码头遗址,建造和使用年代几乎属于同一时期,所以很有可能是防护堤坝的水利设施。4a 区发现的 1 号碎石群,是古代末~中世时代在低地建造的遗址结构,其中堆积了大量自然的木头和兽骨。

此次调查出土的遗物,主要认为有弥生陶器、古代~中世的陶器、中国青瓷等。

(翻訳:陳欣)

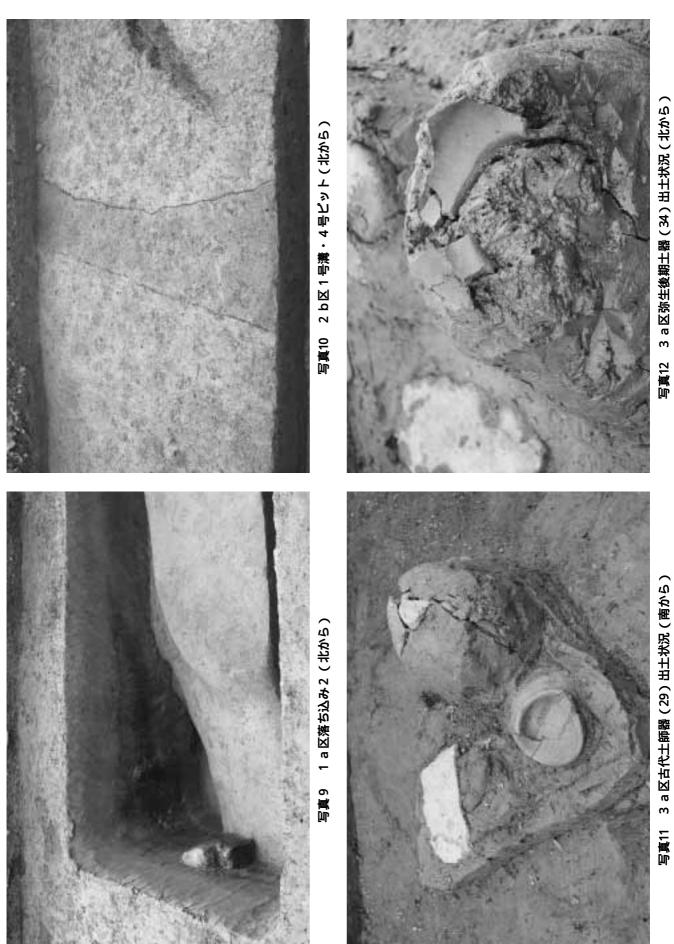
# 2011 년도 하루노쯔지 (原の辻) 유적 후죠우(不條)지구 발굴 조사 성과

2011 년 10 월 7 일~ 12 월 26 일에 걸쳐 하루노쯔지유적 서측저지부의 토지이용을 밝힐 목적으로 발굴 조사를 실시했다. 발굴 조사구로서 남북 5m×동서 20m 의 조사 구 3 개소와 남북 5m×동서 30m 의 조사 구 1 개소를 설정하고, 각각 1 구~4 구의 번호를 부여했다. 또 장변이 20m 와 30m 등으로 길기 때문에 조사구를 반으로 나눠 서측을 a 구, 동쪽을 b 구 (4 구에 관해서는 서측을 a 구, 중앙을 b 구, 동쪽을 c 구)로 하였다. 지금까지의 조사에 따르면 발굴 구의 남측에서 야요이시대 중기의 선착장이 발견되고 있다.

발굴 조사의 결과로 석열유구 1 기, 집석유구 1 기, 구상유구 1 조, 구멍 4 기, 하천 2 조 등이 발견되었다. 지금까지 선착장에 흘러 드는 폭 약 40m 의 하천(강)이 상정되어 왔지만, 3 구 및 4 구에서 확인된 것 같이 하천은 두 갈래로 갈라지고, 강 가운데에 육지 부분이 존재하는 것으로 밝혀졌다. 1 호 석열유구는 3b 구의 2 호 하천 동쪽 해안에서 발견되어, 출토 유물과 토층 퇴적으로 야요이시대 중기의 유구로 밝혀졌다. 이 석열유구는 남측의 선착장과 연결되지 않으므로 동일유구가 아니다. 1 호 석열유구와 선착장이 구축·사용된 연대는 거의 동시기로 호안기능을 가지는 수리시설일 가능성이 있다. 4a 구에서 확인된 1 호 집석유구는 고대 말~중세에 걸쳐 저지에 구축된 유구이고 다량의 자연나무나 짐승뼈가 퇴적되어 있었다.

출토 유물로서는 야요이토기, 고대 ~중세 하지키(土師器), 중국 청자 등이 확인되었다.

(翻訳:古澤)



48

# 原の辻遺跡における放射性炭素年代

(AMS 測定)

㈱加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

原の辻遺跡は,長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1109 2に所在する。測定対象試料は,不條1区9層出土木片(5:IAAA 112225),不條3区5層出土木片(6:IAAA 112226),不條4区4層出土木片(7:IAAA 112227)の合計3点である(表1)。

# 2 測定の意義

木片が出土した層の年代を明らかにする。

# 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い,根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸 アルカリ 酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後, 超純水で中性になるまで希釈し,乾燥させる。AAA 処理における酸処理では,通常 1 mol/ℓ(1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い,0.001 M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」, 1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ,二酸化炭素(CO2)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し,グラファイト( C )を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

# 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C AMS 専用装置(NEC 社製)を使用し,<sup>14</sup>Cの計数,<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C), <sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では,米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1) <sup>13</sup> C は,試料炭素の<sup>13</sup> C 濃度(<sup>13</sup> C / <sup>12</sup> C )を測定し,基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表 1 )。AMS 装置による測定値を用い,表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup> C 年代 (Libby Age: yrBP)は,過去の大気中<sup>14</sup> C 濃度が一定であったと仮定して測定され,1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には,Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach1977)。 <sup>14</sup> C 年代は <sup>13</sup> C によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を表 1 に,補正していない値を参考値として表 2 に示した。 $^{14}$ C 年代と誤差は,下 1 桁を丸めて10年単位で表示される。また, $^{14}$ C 年代の誤差( $\pm$  1 )は,試料の $^{14}$ C 年代がその誤差範囲に入る確率が68 2%であることを意味する。

- (3) pMC(percent Modern Carbon )は,標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup> C 濃度の割合である。pMC が小さい(<sup>14</sup> C が少ない)ほど古い年代を示し,pMC が100以上(<sup>14</sup> C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も <sup>13</sup> C によって補正する必要があるため,補正した値を表1に,補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは,年代が既知の試料の14 C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ,過去の14 C濃度変化などを補正し,実年代に近づけた値である。暦年較正年代は,14 C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり,1標準偏差(1 = 68 2%)あるいは2標準偏差(2 = 95 4%)で表示される。グラフの縦軸が14 C年代,横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は,13 C補正を行い,下一桁を丸めない14 C年代値である。なお,較正曲線および較正プログラムは,データの蓄積によって更新される。また,プログラムの種類によっても結果が異なるため,年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは,暦年較正年代の計算に,IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い,OxCalv4 1較正プログラム(Bronk Ramsey2009)を使用した。暦年較正年代については,特定のデータベース,プログラムに依存する点を考慮し,プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は,14 C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

# 6 測定結果

本片の<sup>14</sup> C 年代は,不條 1 区 9 層出土の 5 が2530±30 yrBP,不條 3 区 5 層出土の 6 が1090±30 yrBP,不條 4 区 4 層出土の 7 が860±20 yrBP である。暦年較正年代(1 )は,5 が786~571 cal BC の間に 4 つの範囲,6 が898~990 cal AD の間に 2 つの範囲,7 が1170~1215 cal AD の範囲で示される。5 は縄文時代晩期から弥生時代への移行期頃,6 は古代,7 は古代から中世頃に相当する。 試料の炭素含有率はすべて50%を超え,化学処理,測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場	所	試料 形態	処理 方法	<sup>13</sup> C( ‰ ) ( AMS )	<sup>13</sup> C 補正 Libby Age( yrBP )	あり pMC( % )
IAAA 112225	5	不條1区	9層	木片	AaA	- 28 .75 ± 0 .39	2 ,530 ± 30	73 .01 ± 0 .24
IAAA 112226	6	不條3区	5層	木片	AAA	- 30 .44 ± 0 .71	1 ,090 ± 30	87 31 ± 0 31
IAAA 112227	7	不條4区	4層	木片	AAA	- 28 50 ± 0 52	860 ± 20	89 90 ± 0 27

[ #4814]

表2

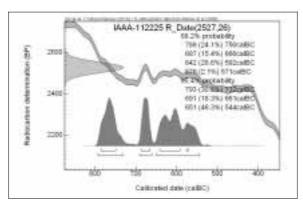
測定番号	13 C 補正なし		暦年較正用	1 暦年代範囲	2 暦年代範囲
- 別た笛与	Age( yrBP ) pMC( % )		(yrBP)	一個十八點四	2 借中代职团
IAAA 112225	2 ,590 ± 30	72 45±0 23	2 527 ± 26	786calBC 750calBC( 24 .1% ) 687calBC 666calBC( 15 .4% ) 642calBC 592calBC( 26 .6% ) 576calBC 571calBC( 2 .1% )	793calBC 732calBQ 30 8% ) 691calBC 661calBQ 18 3% ) 651calBC 544calBQ 46 3% )
IAAA 112226	1 ,180 ± 30	86 34±0 28	1 \( \text{\text{\text{0}}} 89 \pm 28	898calAD 920calAD( 23 2% ) 945calAD 990calAD( 45 0% )	893calAD 1014calAD( 95 4% )
IAAA 112227	910 ± 20	89 26±0 25	855 ± 24	1170calAD 1215calAD(68 2%)	1057calAD 1075calAD( 2 9% ) 1154calAD 1255calAD( 92 5% )

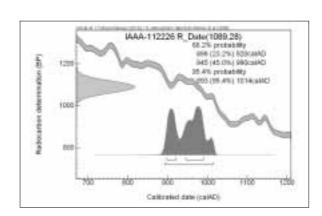
[ 参考値 ]

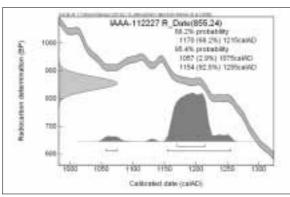
# 【文献】

Stuiver M. and Polach H.A.1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363 Bronk Ramsey C.2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal 09 and Marine 09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150







[参考]暦年較正年代グラフ

# 原の辻遺跡の花粉分析

#### はじめに

長崎県壱岐郡芦辺町・石田町に所在する原の辻遺跡は,壱岐島南東部の深江田原と呼ばれる平野に 舌状に伸びた台地を中心に立地する。これまでの発掘調査から,本遺跡は弥生時代・古墳時代を主体 とした集落跡であることが知られている。

今回の分析調査では,平成23年度調査区の不條1区~4区より採取された土壌試料を対象に,古植生に関する情報を得ることを目的として,花粉分析を実施する。

# 1 試料

分析試料は不條1区~4区より採取された土壌4点であり,これらの土壌試料はタッパーウェアにて採取されている。室内にて試料を観察した結果,不條1区9層は,褐灰色粘土からなり,炭化物がわずかに含まれる。不條3区9層は,褐灰色粘土であり,粘性が高い。不條3区5層は,黒色粘土からなり,炭化材などを含む。なお,本層は河川堆積土壌と考えられている。不條4区4層は,褐灰~灰色粘土からなり,弱い酸化鉄の沈着が認められる。

#### 2 分析方法

試料約10gについて,水酸化カリウムによる泥化,篩別,重液(臭化亜鉛,比重23)による有機物の分離,フッ化水素酸による鉱物質の除去,アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い,物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し,400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し,出現する全ての種類について同定・計数する。同定は現生標本や島倉(1973),中村(1980)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表,及び主要花粉化石群集の散布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは,種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を,草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として,百分率で出現率を算出し図示する。なお,木本花粉総数が100個体未満のものは,統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので,出現した種類を+で表示するにとどめておく。

#### 3 結果

結果を表 1 , 図 1 に示す。不條 1 区 9 層は花粉化石の産状が悪く,定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。わずかに検出される花粉化石の保存状態も悪く,多くの花粉外膜が破損あるいは溶解の影響を受けていた。検出された種類では,木本花粉ではマキ属,マツ属,コナラ属アカガシ亜属,クリ属,シイ属などが,草本花粉ではイネ科,ヨモギ属などが認められる。

不條3区9層では,花粉化石は1個体も検出されず,イノモトソウ属をはじめとするシダ類胞子がわずかに認められるにすぎない。

表 1 花粉分析結果

衣! 化初力价后未 ————————————————————————————————————	T 1/2 1 17	<b>工</b> 燃0豆	7 W 0 G	T 1/2 A 177
種 類	不條1区	不條3区	不條3区	不條4区
 木本花粉	9層	9層	5層	4層
マキ属	7	_	4	6
モミ属 ツガ属	_ 1	_	4 2	3 5
マツ属複維管束亜属	_	_	22	37
マツ属(不明)	15	_	24	100
コウヤマキ属 スギ属	_ 1	_	2 10	14
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	<u>-</u>	_	1	1
ヤマモモ属 サワグルミ属	_	_	1	2
ザワグルミ属 クマシデ属ーアサダ属	_	_	1 2	2
カバノキ属	_	_	2	2
ハンノキ属 ブナ属	_	_	2	_
ファ属 コナラ属コナラ亜属	_	_	20	3
コナラ属アカガシ亜属	2	_	83	25
クリ属 シイ属	2	_	11 28	1
ニレ属ーケヤキ属	_	_	5	i
エノキ属ームクノキ属	1	_	10	2
キハダ属 ウルシ属	1	_	1 2	_
ブドウ属	1	_	_	3
ノブドウ属	-	_	1	1
グミ属 イボタノキ属	1	_	1	1
トネリコ属	_	_	2	<u>-</u>
ガマズミ属	_	_	1 2	-
スイカズラ属 草本花粉				
ガマ属	_	_	3	11
ミクリ属 オモダカ属	_	_	4 1	1
ってアカ属 ミズオオバコ属	_	_	i	
イネ科	9	_	454	358
カヤツリグサ科 イボクサ属	2	_	50 3	51 -
ミズアオイ属	_	_	8	_
クワ科 ギシギシ属	-	-	1	-
ヤンキン禹 サナエタデ節 ー ウナギツカミ節	_	_	1 47	28
ソバ属	_	_	_	2
アカザ科 ナデシコ科	_	_	3	1
カラマツソウ属	_	_	2	3 1
キンポウゲ属	-	-	1	2
キンポウゲ科 アブラナ科	_	_	4	1 5
バラ科	_	_	3	_
マメ科	_	_	2	_
セリ科 ゴキヅル属	_	_	20 3	12 _
ヨモギ属	12	_	68	46
オナモミ属 キク亜科	_ 2	_	_ 4	1
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 2	_	7	17 20
不明花粉				
<u>不明花粉</u> シダ類胞子	6		18	17
デンジソウ属	_	_	_	2
イノモトソウ属	_	7	_	-
ミズワラビ属 他のシダ類胞子	166	<u> </u>	- 86	4 188
合計				
木本花粉 ************************************	35	0	247	212
草本花粉 不明花粉	27 6	0	690 18	561 17
シダ類胞子	166	32	86	194
合計(不明を除く)	228	32	1023	967

その花粉化石群集についてみると、 木本花粉ではアカガシ亜属が最も多く 産出し、マツ属、スギ属、コナラ亜属、カリ属、シイ属、エナリキ属、カリーのでは、カヤツリグサ科、サイエタデ節・ウナギッカミが、オオバシーのでは、オモダカ属、まこズオオバッルには、カー・大工を呼いまた。ガマボクサーのでは、カー・大工をである。 アイボクサーのでは、カー・スを作った。カー・スを作った。カー・スを作った。カー・スを作った。カー・スを作った。カー・スを作った。カー・スを作った。

# 4 考察

花粉化石の産出状況が悪かった不條 1区11層および不條3区9層について は,花粉化石から古植生を検討することは困難である。花粉化石・シダ類胞 子の産出状況が悪い場合,元々取り込まれる花粉量が少なかった,あるいは 取り込まれた花粉が消失した,という

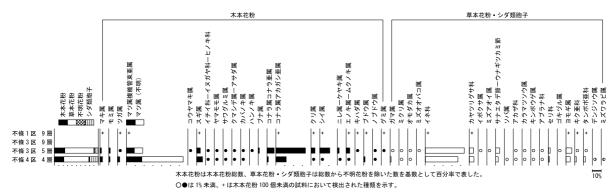


図 1 主要花粉化石群集

2つの原因があげられる。今回,不條1区9層よりわずかに検出された花粉化石は,花粉外膜が破損・溶解するなど保存状態が悪かった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が,常に酸化状態にあるような場合,花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。これらのことから,不條1区9層および不條3区9層では,堆積時に花粉・シダ類胞子が取り込まれにくかった,あるいは取り込まれた花粉・シダ類胞子が経年変化により分解・消失した可能性がある。なお,不條1区9層から検出される種類は,後述する不條3区5層および不條4区4層で多産する種類であることから,同様の植生を反映していた可能性がある。

花粉化石が豊富に産出した不條 3 区 5 層および不條 4 区 4 層をみると,木本類で多産する種類は同様であるが,産出する割合が試料により異なる。不條 3 区 5 層ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し,マツ属,スギ属,コナラ属コナラ亜属,クリ属,シイ属,二レ属 - ケヤキ属,エノキ属 - ムクノキ属等を伴う。これに対し不條 4 区 4 層ではマツ属が多産し,マキ属,ツガ属,スギ属,アカガシ亜属等を伴い,コナラ亜属,クリ属,シイ属,二レ属 - ケヤキ属,エノキ属 - ムクノキ属等の割合が低くなる。このうち,アカガシ亜属,シイ属などは暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり,マキ属,ツガ属,スギ属などは温帯針葉樹樹林の構成要素である。マツ属(特に複維管束亜属)は生育の適応範囲が広く,尾根筋や湿地周辺,海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能であるほか,極端な陽樹であることから,伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。また,コナラ亜属,ニレ属 - ケヤキ属,エノキ属 - ムクノキ属などは,渓谷沿いや河畔などに生育する種が含まれており,サワグルミ属,クマシデ属 - アサダ属,ハンノキ属等も同様である。

これらの生育環境と2試料の堆積環境,すなわち不條3区5層が河川堆積土壌,不條4区4層が落ち込み堆積土壌と想定されていることを考慮すると,不條3区5層では河川の集水域などの比較的広範囲の森林植生を反映するのに対し,不條4区4層では,調査区周辺の比較的近傍の植生を反映している可能性がある。従って,周辺にはアカガシ亜属やシイ属を主体する常緑広葉樹林が主に生育しており,部分的にマキ属,ツガ属,スギ属等の温帯針葉樹も生育していたと考えられる。また,幡鉾川をはじめとする周辺河川沿いなどに,コナラ亜属,二レ属-ケヤキ属,エノキ属-ムクノキ属等の木本類が生育していた可能性がある。一方,調査区周辺については,両試料とも草本類の占める割合が高いことから,開けた空間が存在していたと推測され,その周囲では二次林や海岸植生などのマツ属

が多く認められたと考えられる。

一方草本類の産状を見ると,両試料とも群集組成が類似しており,イネ科が多産し,カヤツリグサ科,サナエタデ節・ウナギツカミ節,セリ科,ヨモギ属,キク亜科,タンポポ亜科等を伴う。これらは,いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群である。よって,これらが遺跡内やその周囲に草地を形成していたと推測される。また,ガマ属,ミクリ属,オモダカ属,ミズオオバコ属,イボクサ属,ミズアオイ属,ゴキヅル属,デンジソウ属,ミズワラビ属など,水湿地に生育する草本・シダ類が検出された。このことから,不條3区5層を形成した河川やその周辺湿地に,これらの水湿地生植物が生育していたと推測される。なお,不條4区4層からは,栽培種であるソバ属の花粉も検出されたことから,当該期における栽培・利用が窺える。

既存の調査事例によると,九州北部では約8,000年前頃を境にアカガシ亜属,シイ属,マキ属などからなる照葉樹林へ移行し 約6,000年前以降に優占するが,弥生時代中期~古墳時代(約2,000~1,500年前)になるとマツ属やイネ科が急激に増加し始めるとされている(畑中ほか,1998など)。今回の分析結果も,既存の調査事例と調和的である。また,過去に花粉分析が実施されている石田高原地区の弥生時代後期~古墳時代初頭とされる溝覆土では草本花粉が多産し,イネ科が優占する群集が得られている(株式会社 古環境研究所,2003)。今回の分析結果でも,これと同様の傾向が認められた。

#### 【引用文献】

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II(図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91 p.

島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

畑中健一・野井英明・岩内明子,1998,九州地方の植生史.安田喜憲・三好教夫(編著),図説 日本列島植生史,朝倉書店,151 161.

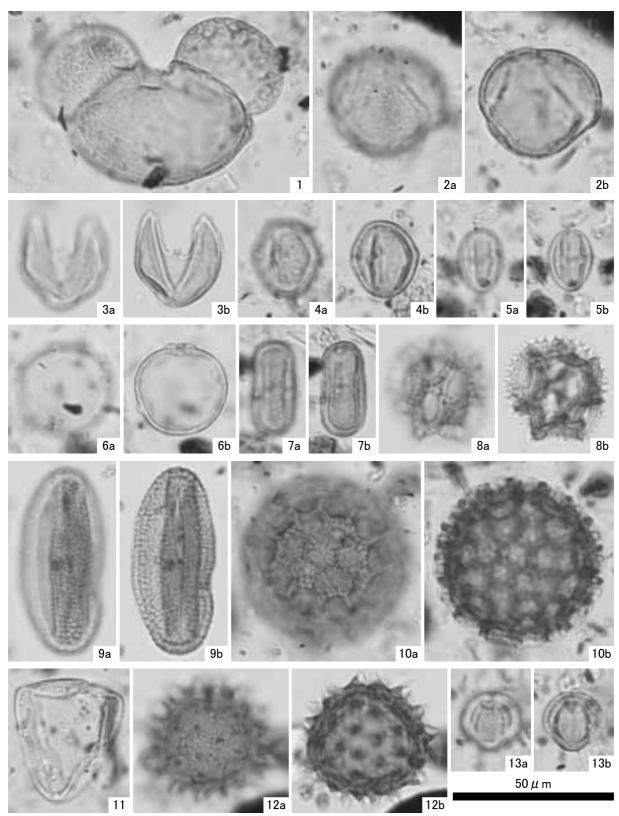
株式会社 古環境研究所,2003,原の辻遺跡(平成14年度調査研究事業)における自然科学分析.原の辻遺 跡調査事務所調査報告書 第26集 原の辻遺跡 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書,長崎県教育委員会, 173,187

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,1530.

中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,5073.

)本分析は,パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1.マツ属(不條3b区;2層)

- 3 スギ属(不條4a区,7層)
- 5.シイ属(不條3b区;2層)
- 7.セリ科(不條3b区;2層)
- 9 ソバ属(不條4a区;7層)
- 11.カヤツリグサ科(不條3b区;2層)
- 13. ヨモギ属(不條3b区;2層)

2. コナラ属コナラ亜属(不條3b区;2層)

- 4. コナラ属アカガシ亜属(不條3b区;2層)
- 6. イネ科(不條3b区;2層)
- 8. タンポポ亜科(不條4a区;7層)
- 10. サナエタデ節 ウナギツカミ節(不條3b区;2層)
- 12 . キク亜科(不條4a区;7層)

図版 1 花粉化石

56

# 報告書抄録

- 10 13	+ 1170								
		つじいせき							
書	名原の辻	:遺跡							
副書	名原の辻	遺跡調査調査	<b>查研究事業</b>	調査報告	書				
巻	次								
シリーズ	名 長崎県	埋蔵文化財t	2ンター調	查報告書	<b>=</b>				
シリーズ番	号 第5集								
編著者	名 古澤義	久・田口貴ク	ス・林隆広	・宮武直	人				
編集機	関 長崎県	埋蔵文化財t	2ンター						
所 在	地 〒811	5322 長崎県	?壱岐市芦	辺町深江	[鶴亀触	515番地 1	TEL0920(	45 ) 4080	
発行年月	日 西暦20	西暦2012年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりが 所 在	地 市町村	ー ド 遺跡番号	北緯。	東経。	調査期間	調査面積	調査原因	
京の辻遺跡	at the property of the prope	市 42424 は 自由 , の ノ ク	72 92	33 45 30	129 45 55	2011 .5 26 2011 .7 29 2011 .10 .7 2011 .12 26	400 m <sup>2</sup>	原 跡 第 の まま から いっぱ から いっぱ の いっぱ の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	
収録遺跡名	種 別	主な時代	主な	遺構	主	な遺物	特記	事項	
原の辻遺跡 (柏田地区) (原ノ久保地区)	集落集落	旧石器時代旧石器時代				<b>器・弥生土</b>	_	_	
(不條地区)	集落	弥生時代・古代・中世	ピット			上器,中世 器等	・石列の多	<b></b>	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第5集

# 原の辻遺跡

2012 (平成24)年3月31日

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂